京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2025-2

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇二五-二　龍安寺御陵ノ下町遺跡　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

龍安寺御陵ノ下町遺跡

2026年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

龍安寺御陵ノ下町遺跡

2026年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、立命館大学新校舎建設に伴う龍安寺御陵ノ下町遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

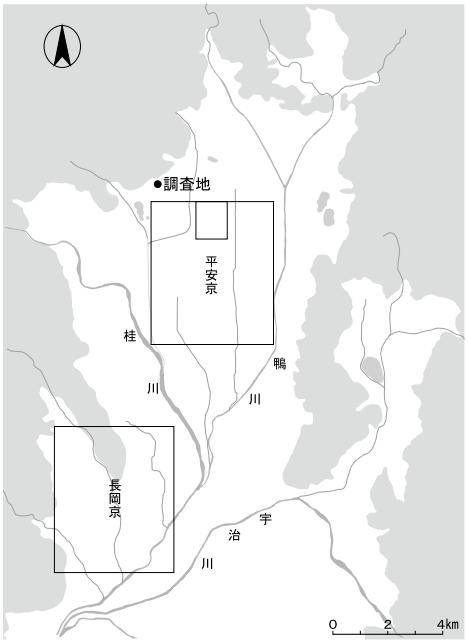
令和８年３月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	龍安寺御陵ノ下町遺跡　（京都市番号　24S232）
2	調査所在地	京都市右京区龍安寺御陵ノ下町２－３、２－４
3	委　託　者	学校法人　立命館　理事長　森島朋三
4	調 査 期 間	2024年12月23日～2025年４月17日
5	調 査 面 積	600㎡
6	調査担当者	西田倫子
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「宇多野」・「衣笠山」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。土器類は番号のみとし、瓦類は「瓦」、石製品は「石」を前に付けた
13	本 書 作 成	西田倫子
14	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
15	協　力　者	調査・整理にあたっては、以下の方々からご教示をいただいた。記して感謝いたします。（敬称略） 赤松佳奈（京都市文化財保護課）、手島美香（城陽市歴史民俗資料館）



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
２．位置と環境 …… 3
（１）歴史的環境と立地 …… 3
（２）既往の調査 …… 3
３．遺　　構 …… 6
（１）基本層序 …… 6
（２）１区の遺構 …… 6
（３）２区の遺構 …… 8
（４）３区の遺構 …… 10
４．遺　　物 …… 12
（１）遺物の概要 …… 12
（２）土器類 …… 12
（３）瓦類 …… 15
（４）石製品 …… 16
５．ま と め …… 18

図　版　目　次

図版１　遺構　１区平面図（１：150）
図版２　遺構　１区北壁・西壁断面図（１：100）
図版３　遺構　２区平面図（１：150）
図版４　遺構　２区南壁・西壁断面図（１：100）
図版５　遺構　３区平面図（１：80）
図版６　遺構　３区北壁断面図（１：80）
図版７　遺構　１区建物１・柱穴列１実測図（１：50）
図版８　遺構　２区建物２・３実測図（１：50）
図版９　遺構　２区柱穴列２・３実測図（１：50）
図版10　遺構　２区建物４実測図（１：50）
図版11　遺構　２区井戸480・879、石列892、土坑880・882実測図（１：50）

図版12　遺物　鎌倉時代の土器実測図（１：４）
図版13　遺物　室町時代の土器実測図１（１：４）
図版14　遺構　１　１区全景（西から）
２　溝181（東から）
３　溝123・175、土坑124（北東から）
図版15　遺構　１　２区全景（東から）
２　２区西半柱穴群検出状況（北から）
図版16　遺構　１　井戸879・480検出状況（北から）
２　井戸879・480断面（北から）
図版17　遺構　１　土坑882瓦器鍋出土状況（北から）
２　土坑633土器出土状況（北東から）
３　建物４ 柱穴725（南から）
図版18　遺構　１　３区全景（西から）
２　溝４・62・67・55（南から）
３　溝56・15（南から）
図版19　遺構　１　土坑49瓦器鍋出土状況（北から）
２　井戸33埋納状況（西から）
３　溝４硯出土状況（北西から）
４　柱穴13土器出土状況（東から）
図版20　遺物　鎌倉時代の土器類
図版21　遺物　室町時代の土器類
図版22　遺物　瓦類、石製品

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：5,000）　……　1
図２　調査区配置図（１：800）　……　2
図３　１・３区調査前全景（南東から）　……　2
図４　２区調査前全景（南西から）　……　2
図５　２区作業状況（西から）　……　2
図６　３区作業状況（西から）　……　2
図７　周辺調査位置図（１：5,000）　……　4

図８　３区溝４・15・55・56・62・67、土坑66断面図（１：50）　…… 10
図９　室町時代の土器実測図２（１：４）　…… 14
図10　江戸時代の土器実測図（１：４）　…… 15
図11　瓦類拓影及び実測図（１：４）　…… 15
図12　石製品実測図（１：４、石７のみ１：２）　…… 16
図13　遺構変遷図（１：500）　…… 19

表　目　次

表１　周辺調査一覧表　…… 4
表２　遺構概要表　…… 6
表３　遺物概要表　…… 12

付　表　目　次

付表１　土器一覧表　…… 20
付表２　瓦類一覧表　…… 23
付表３　石製品一覧表　…… 23

龍安寺御陵ノ下町遺跡

１．調査経過

本調査は、京都市右京区龍安寺御陵ノ下町２－３、２－４で実施した立命館大学衣笠キャンパスデザイン・アート学部、デザイン・アート学研究科（仮称）設置に伴うものである。調査地は、龍安寺御陵ノ下町遺跡に該当する。工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）が試掘調査を実施したところ、多数の遺構が確認されたため、発掘調査の指導が行われ、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて調査を実施することとなった。発掘調査区は、文化財保護課の指導により、３箇所設定した。１区は敷地北西側に東西約25ｍ、南北約８ｍの長方形（約200㎡）の調査区として設定した。２区は南北約12ｍ、東西約27.5ｍで、北東部を西へ約9.5ｍ南へ約４ｍ控えてＬ字（約292㎡）の調査区を設定したが、北東部で井戸を検出したため、北へ約２ｍ拡張した（合計約308㎡）。３区は敷地東側に東西約15ｍ、南北約６ｍの長方形（約90㎡）の調査区に設定したが、南東部で鍋を据え付けた土坑を検出したため、南へ0.4ｍと0.6ｍのＬ字状に拡張した（合計約92㎡）。調査面積は600㎡である。調査は2024年12月23日から開始した。遺構面は、基盤層上面を１面として調査を行った。調査では、鎌倉・室町時代の建物、井戸、溝などを検出した。随時文化財保護課の指導を受け、2025年２月28日に検証委員の木立雅朗氏（立命館大学教授）の検証を受けた。４月17日に全ての調査を終了した。

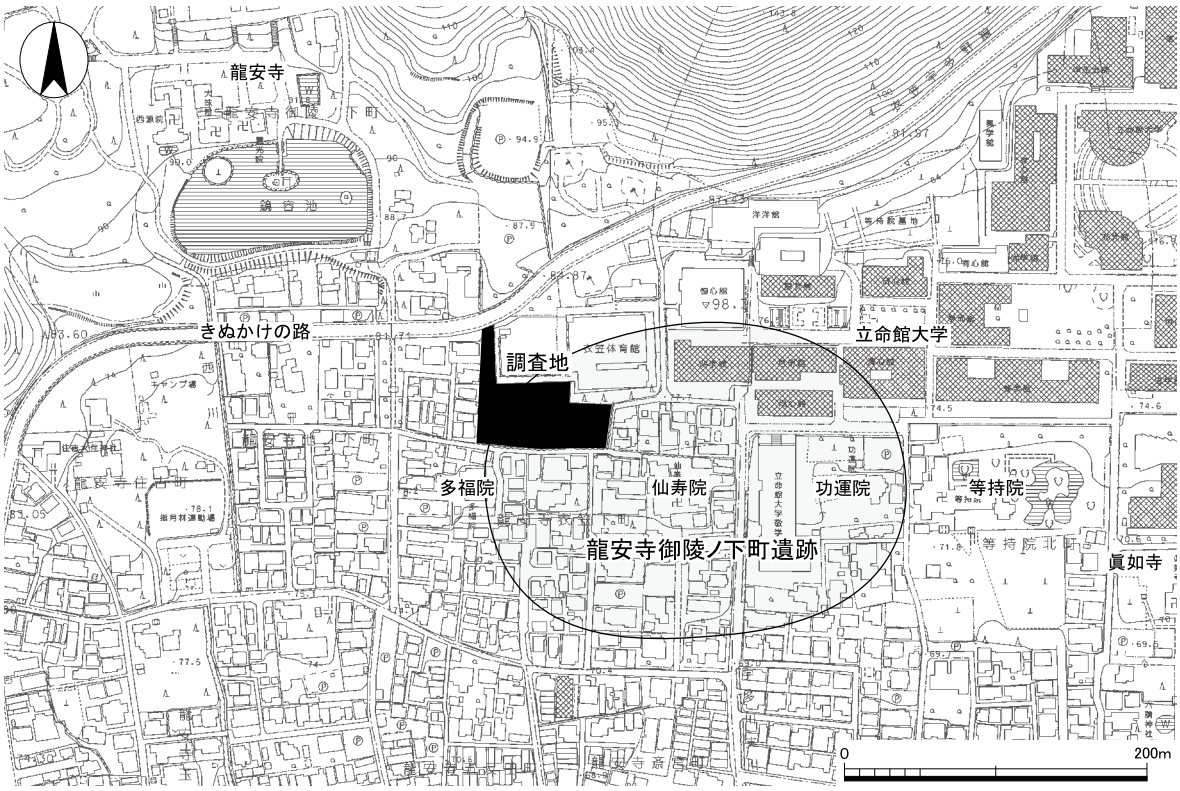


図１　調査位置図（１：5,000）

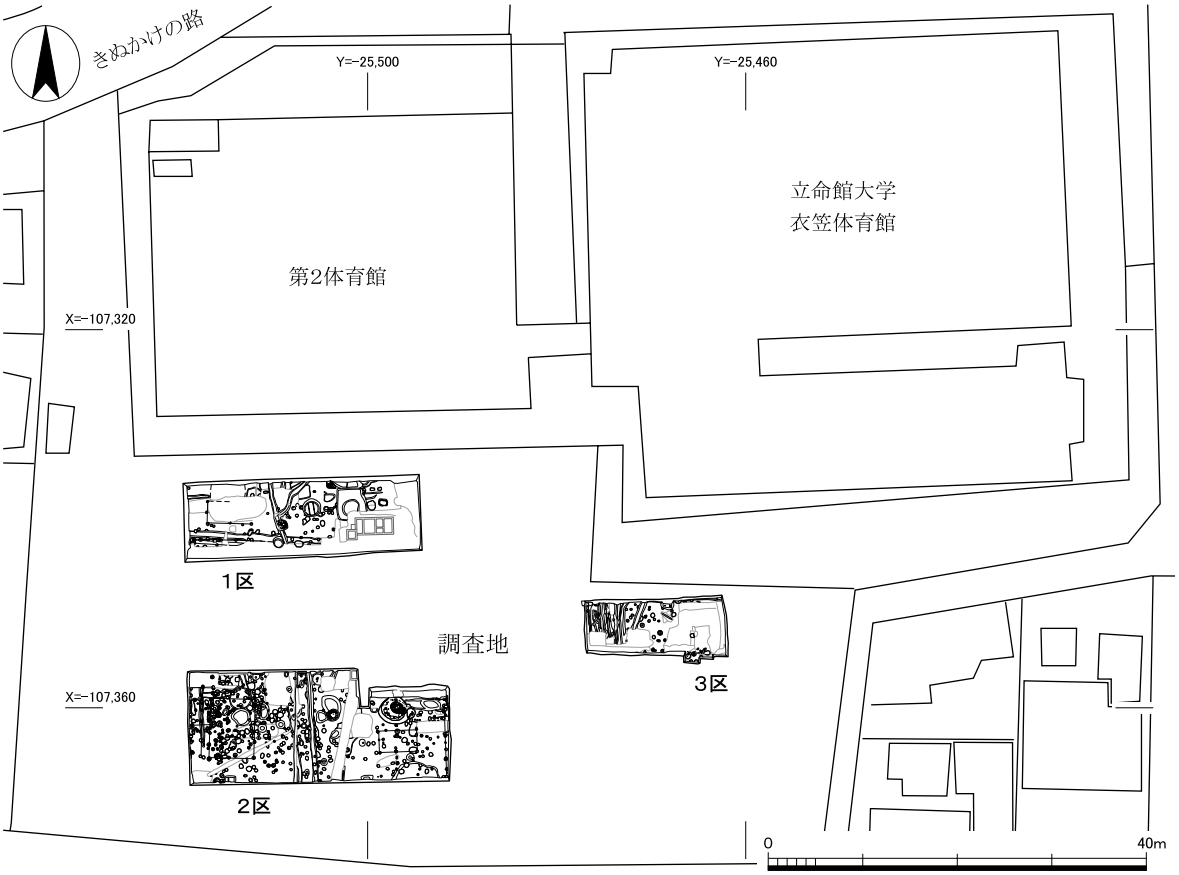


図２　調査区配置図（１：800）

図３　１・３区調査前全景（南東から）

図４　２区調査前全景（南西から）

図５　２区作業状況（西から）

図６　３区作業状況（西から）

２．位置と環境

（１）歴史的環境と立地

龍安寺御陵ノ下町遺跡は、龍安寺の南東、等持院の西に位置する。当地では、平安時代から鎌倉時代の瓦や室町時代の土師器などが採集されており、遺跡として登録された。

調査地は宝徳２年（1450）、龍安寺が建立されると同４年に龍安寺領となり、龍安寺門前村と称されるようになった。大内山と衣笠山の間の渓谷入口にあたることから、江戸時代頃には「谷口」と称されていた。明治２年には上地となり、妙心寺門前村と合併し、谷口村となる。村の南辺を一条街道が通る[1)]。調査地周辺には、平安・室町時代に建設された寺院やその子院が存在する。

調査地北には龍安寺がある。龍安寺は宝徳２年（1450）に徳大寺の跡地に建立されたとされる。宝徳２年（1450）細川勝元がその地を譲り受けて寺地とし、妙心寺塔頭として創建された。塔頭は21箇所あったとされ、現在は大珠院・西源院・霊光院が残る[1)]。また塔頭の中には、多福庵の名称がみられ、調査地南にある多福院に引き継がれたと考えられる。龍安寺は応仁の乱により焼亡するも、細川勝元が書院を移して方丈とし、文明５年（1473）には東福寺塔頭の昭堂を移し仏殿としており、その頃には復興されたと考えられる[1)]。

調査地西には仁和寺がある。仁和寺は仁和２年（886）に光孝天皇が建立を発願した寺院である。光孝天皇は翌年崩御し、宇多天皇が遺志を継ぎ造営を進め、仁和４年（888）８月17日に金堂供養が行われている。平安時代には、およそ二里四方の寺地を持ち、多くの堂宇や院家・子院が存在したとされる。鎌倉時代までには円融寺・円教寺などのいわゆる四円寺と法金剛院・常楽院など多くの院家・子院が周辺に存在し、隆盛を極めた。この四円寺のひとつ円融寺が龍安寺の地に存在したとされている。『日本記略』によれば、円融寺の北原が円融天皇火葬所とされている。現在、龍安寺の北に広がる朱山には円融天皇の火葬所があり、このことから龍安寺付近に円融寺が存在していたと考えられる。円融寺は、『日本略記』天元六年（983）三月二十二日に「新造御願円融寺供養。」とあり、この頃に創建された[2)]。また円融寺が衰退した後、徳大寺が建立される。徳大寺の初見は『左経記』長元八年（1035）八月六日条である。その後、この地に山荘を営んでいた左大臣藤原実能が久安３年（1147）６月に当寺辺に一堂を建立供養したとされる。その堂は保元元年（1156）５月に焼失するものの、寺は徳大寺家によって伝領される。草創、規模等は未詳である[3)]。

（２）既往の調査（図７、表１）

調査地周辺で、発掘調査が実施されたのは1975年、2010年の２回である。その他の調査は立会調査によるものである。

龍安寺境内で1975年に実施された発掘調査（１）では、室町時代から江戸時代における築地や開山堂の基壇の痕跡を確認している。2007年の確認調査（２）では、江戸時代から明治時代の礎石据え付け穴や溝状遺構、ピットなどが確認されている。

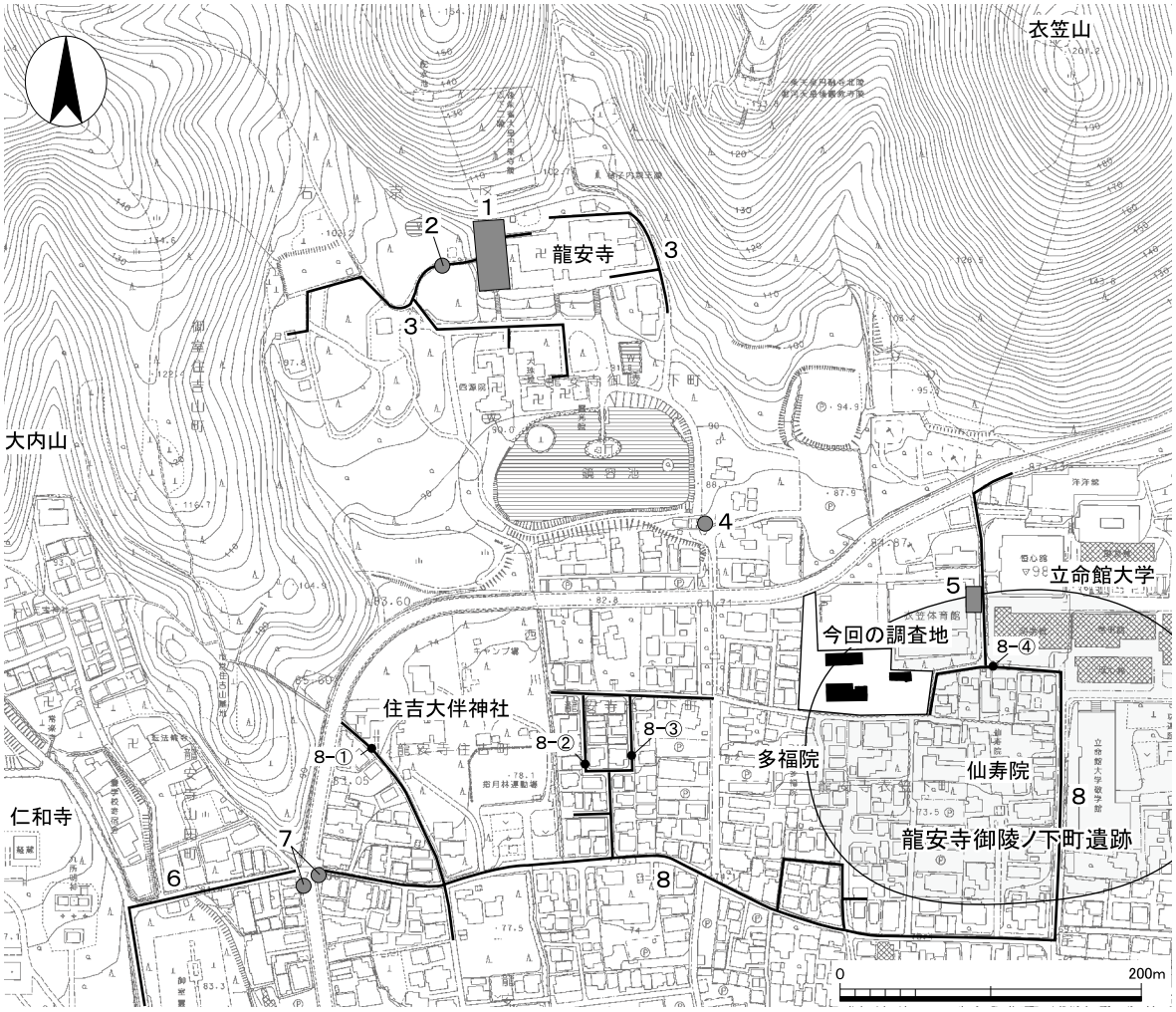


図７　周辺調査位置図（１：5,000）

表１　周辺調査一覧表

番号	遺跡名	調査年	主要な遺構	文　　献
1	史跡　竜安寺境内	1975	室町～江戸:築地、石列、柱穴、開山堂基壇。	杉山信三・鈴木広司『竜安寺昭堂復原工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報－史跡竜安寺境内－』竜安寺・鳥羽離宮跡調査研究所　1975年
2	名勝　龍安寺庭園	2007	江戸～明治:礎石据付穴、溝状遺構、ピット。	柏田有香「名勝龍安寺庭園」『平成19年度財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』（財）京都市埋蔵文化財研究所　2010年
3	名勝　龍安寺庭園	2007・2008	時期不明:路面、石敷遺構。 近世以降:包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報』平成20年度　京都市文化市民局　2009年
4	名勝　龍安寺庭園	2016	なし(盛土内)。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告』平成28年度　京都市文化市民局　2017年
5	龍安寺御陵ノ下町遺跡	2010	平安中期末～後期:土坑、石組遺構、溝、柱穴、ピット。鎌倉～江戸:土坑、溝、柱穴、ピット、礎石状の石。	布川豊治『龍安寺御陵ノ下町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-5（財）京都市埋蔵文化財研究所　2010年
6	円乗寺跡	1999	なし(GL-0.18～0.35m以下、黄褐色系地山)。	『京都市内遺跡立会調査概報』平成11年度　京都市文化市民局　2000年
7	円乗寺跡	1997	時期不明:GL-0.8mから約0.2m厚の耕作土、-1m以下地山。	『京都市内遺跡立会調査概報』平成9年度　京都市文化市民局　1998年
8	円教寺跡	1985	平安中期:遺物包含層(①)。平安後期:南北溝。平安後期～鎌倉:土坑。鎌倉～室町:遺物包含層、東北－南西方向溝(②)。室町:遺物包含層(③・④)、落込(③)、土坑(④)。江戸:南北方向溝、土坑。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度　京都市文化観光局　1986年

※遺跡名は文献に準じた。

2010年の発掘調査（５）は、調査地の北東部で実施している。平安時代中期末から後期の南北溝と道路遺構、鎌倉時代の礎石を確認していることから、平安時代中期末頃には、衣笠山山麓に開発が及んでいたとし、また室町時代の蔵骨器を確認しており、墓所として利用した可能性が指摘されている。

その他、立会調査では平安時代から江戸時代の遺物包含層や遺構を確認している。特に、1985年の立会調査（８）では、①地点で平安時代中期の遺物包含層、②地点では、鎌倉時代から室町時代の遺物包含層と北東から南西方向の溝を検出している。③・④地点では、室町時代の遺物包含層、③地点では南に下がる落込、④地点では土坑を確認している。

註

１）『日本歴史地名大系第二七巻　京都市の地名』 株式会社平凡社　1979年

２）『史料　京都の歴史』第14巻　右京区　株式会社平凡社　1994年

３）古代学協会・古代学研究所『平安時代史辞典』本編上下　角川書店　1994年

３．遺　　構

（１）基本層序（図版２・４・６）

調査地の地形は北から南へ降る勾配を持つ。

１区（図版２）　調査地の北部に位置する。１区は２・３区より一段高く、調査区の南側、東側が削平されている。現地表面の標高は79.4～79.5ｍである。基本層序は、現地表面から下に0.4～0.9ｍが現代盛土で、その下に江戸時代の整地層が0.1～0.2ｍの厚さで堆積する（北壁２～５層、西壁２層）。江戸時代の整地層を除去すると明黄褐色シルトや黄橙色シルトなどの基盤層となる（北壁26～33層、西壁７・８層）。基盤層上面の標高は78.6～78.9ｍである。

２区（図版４）　２区の現況は、ほぼ平坦になっており、現地表面の標高は78.0～78.4ｍである。基本層序は、現地表面から下に0.2～0.5ｍが現代盛土で、その下に江戸時代の整地層が最大0.2ｍの厚さで堆積する（南壁13層、西壁３層）。北半では江戸時代の整地層を除去すると径0.5～１㎝の礫を含むにぶい黄褐色極細砂の基盤層となる（西壁９層）。また南半では江戸時代の整地層の下に、室町時代の整地層が堆積する（南壁25～27層、西壁４層）。この室町時代の整地層を除去すると基盤層となる（南壁30～33層、西壁９～12層）。基盤層上面の標高は77.2～77.9ｍである。

３区（図版６）　３区も現況は、ほぼ平坦になっており、現地表面の標高は78.2～78.4ｍである。基本層序は、現地表面から下に0.5～0.9ｍが現代盛土で、その下に江戸時代整地層が0.1～0.2ｍの厚さで堆積する（北壁１・６・７層）。江戸時代整地層を除去すると粗砂を含む黄橙色シルトなどの基盤層となる（北壁44～46層）。基盤層上面の標高は77.9～77.3ｍである。

各調査区とも、調査は基盤層上面で行った。以下、各調査区ごとに各時期の主要な遺構について概説する。

（２）１区の遺構（図版１・14）

１）鎌倉時代の遺構

溝181（図版７・14）　調査区南端で検出した。東西方向の溝である。検出長は約13.8ｍで、幅は0.5～0.6ｍある。検出面からの深さは約0.2ｍである。溝底の標高は西端が78.41ｍ、東端が78.24

表２　遺構概要表

時　　代	遺　　構		
	１　区	２　区	３　区
鎌倉時代	土坑205・219、 溝181・182	建物２・３、柱穴列２、 柱穴499、土坑469・636	柱穴13・58、土坑49・66・72、 井戸33、溝４・55・62・67
室町時代	建物１、柱穴列１	建物４、柱穴列３、柱穴724、 土坑633・880・882、 井戸480・879、石列892	柱穴７、溝15・42・56
江戸時代	土坑124・170、 溝101・123・175	溝306・536	

mで、東が西より低い。埋土は径２㎝の礫を含むシルトと極細砂（図版７－２～４層）である。埋土からは６Ｃ段階の土器類が出土した。

溝182（図版７）　調査区南端で検出した。東西方向の溝である。南肩部を約5.7ｍ確認した。北側は溝181で削平されている。検出長は約13.8ｍで、残存幅は0.4～0.5ｍある。検出面からの深さは約0.17ｍである。溝底の標高は西端が78.30ｍ、東端が78.28ｍで、南東が北西より若干低い。埋土は径３㎝の礫を含むシルト（図版７－５・６層）である。埋土からは６Ｃ段階の土器類が出土した。

土坑205　調査区中央南端で検出した。南半は攪乱を受け、攪乱の底で掘形を確認した。平面形は円形で径約１ｍある。深さは最大で検出面から約0.9ｍある。埋土から７Ａ段階の土器類がまとまって出土した。

土坑219　調査区中央北寄りで検出した、不整形な土坑である。検出長は東西約1.1ｍ、南北約1.2ｍある。深さは最大で検出面から約0.16ｍある。埋土から７Ｂ段階の土器類がまとまって出土した。

２）室町時代の遺構

建物１（図版７）　東西２間、南北２間の掘立柱建物である。柱間は、東西2.4ｍ、2.2ｍ、南北1.1ｍ、1.2ｍである。柱掘形の平面形は、径0.2～0.3ｍの円形あるいは角丸方形を呈し、底部に石が据えられていた柱穴がある。遺物は少量だが、各柱穴から９Ｃ段階に属する土器類が出土した。方位は東に対して南に２度振る。

柱穴列１（図版７）　調査区南端で検出した東西方向の柱列である。柱間は0.3～1.4ｍと不均等である。柱列を構成する柱穴は径0.2～0.6ｍ、深さは0.2～0.35ｍある。方位は東に対して南に２度振る。

３）江戸時代の遺構

溝101　調査区北西端で検出した。東西方向の溝である。検出長は約2.3ｍで、幅は0.35～0.4ｍある。検出面からの深さは約0.1ｍである。溝底の標高は西端が78.69ｍ、東端が78.70ｍと、ほぼ水平である。埋土は径３㎝の礫を含む極細砂（図版２－西壁４層）である。

溝123（図版14）　調査区中央で検出した。南北方向の溝である。検出長は約6.5ｍで、幅は0.4～0.6ｍある。検出面からの深さは0.15～0.37ｍである。溝底の標高は北端が78.22ｍ、南端が78.02ｍと、南が北より低い。埋土は径１～３㎝の礫を含むシルトと細砂（図版２－北壁６・７層）である。埋土からは江戸時代の土器類が出土した。

溝175（図版14）　調査区中央で検出した。北東から南西方向の溝である。検出長は直線距離で約4.5ｍ、幅は0.4～0.6ｍある。ゆるやかに蛇行して溝123と合流する。検出面からの深さは約0.18～0.23ｍである。溝底の標高は北東端が78.46ｍ、南西端が78.20ｍと、南西が北東より低い。埋土は粗砂や径２㎝の礫を含むシルト（図版２－北壁13層）である。埋土からは19世紀の土器類が出土した。

土坑170　調査区中央北端で検出した。不整形な土坑である。検出長は東西約0.9ｍ、南北約0.8

mある。深さは最大で検出面から約0.34ｍある。埋土には径0.1～0.2ｍ大の石が多く含まれている。埋土から江戸時代の土器類とともに、鎌倉時代の巴文軒丸瓦が出土している。

土坑124（図版14）　調査区中央南寄りで検出した。隅丸方形の土坑である。西側は溝123に削平されている。埋土の上層は径0.2ｍ大の石の上に軒桟瓦や桟瓦、平瓦が積まれており、下層は粗砂を含む粘質シルトで埋まる。検出長は東西約0.9ｍ、南北約0.8ｍある。深さは検出面から約0.45ｍある。埋土から江戸時代の瓦類と少量の土器類が出土した。

（３）２区の遺構（図版３・15）

１）鎌倉時代の遺構

建物２（図版８）　調査区東側で検出した。東西２間、南北１間の掘立柱建物である。柱間は、東西1.8～2.2ｍ、南北2.25ｍで不均等である。柱掘形の平面形は、径0.2～0.5ｍの円形あるいは楕円形を呈し、底部に石が据えられていた柱穴がある。方位は東に対して北に２度振る。

建物３（図版８）　調査区西端で検出した。南北３間、東西１間の掘立柱建物である。柱間は、東西2.35ｍ、南北0.8～1.8ｍと不均等である。柱掘形の平面形は、径0.3～0.7ｍの円形あるいは楕円形を呈し、底部に石が据えられていた柱穴がある。柱穴359からは、平安時代後期の軒平瓦が出土した。方位は北に対して西に２度振る。

柱穴499　調査区南西部で検出した。掘形の平面形は径0.45ｍの円形を呈し、深さは約0.15ｍある。ほぼ完形の瓦器の椀が１点出土した。

柱穴列２（図版９）　調査区東端で検出した南北方向の柱列である。柱間は0.9～1.8ｍと不均等である。柱列を構成する柱穴は径0.2～0.4ｍの円形あるいは楕円形を呈する。深さは0.08～0.18ｍある。底部に石が据えられていた柱穴がある。方位は北に対して東に２度振る。

土坑469　調査区西側で検出した。径0.5ｍの円形を呈す。検出面からの深さは0.16ｍある。旧石器時代から縄文時代の剥片と鎌倉時代頃の土器の小片が出土した。

土坑636　調査区北東部で検出した。南側は削平され、土坑の北肩部が残存する。検出長は東西約1.5ｍ、南北約0.5ｍある。深さは最大で検出面から約0.6ｍある。埋土から６Ｂ段階の土器類がまとまって出土した。

２）室町時代の遺構

建物４（図版10・17）　調査区西側で検出した。南北４間、東西２間の掘立柱建物である。柱間は、東西1.8～2.9ｍ、南北1.0～2.1ｍと不均等である。柱掘形の平面形は、径0.3～0.4ｍの円形あるいは楕円形を呈し、底部に石が据えられていた柱穴がある。柱穴340からは９Ｃ段階の土器類と、華南産と考えられる輸入陶器が、柱穴725からは瀬戸産の仏花瓶が出土した。方位は北に対して東に２度振る。周辺には柱穴が多く見られ、建物の規模はもう少し大きくなる可能性がある。

柱穴列３（図版９）　調査区北西部で検出した南北方向の柱列である。柱間は0.70～1.95ｍと不均等である。柱列を構成する柱穴は径0.2～0.4ｍの円形あるいは楕円形を呈する。深さは0.1～0.38ｍある。方位は北に対して東に２度振る。

井戸879（図版11・16）　調査区北東部で検出した。北東部は井戸480で削平を受け、北側は攪乱により削平されている。検出長は東西約3.3ｍ、南北約2.8ｍ以上ある。人力掘削で検出面から約0.8ｍまで掘り下げ、調査終了時に重機で掘り下げ、標高75.7ｍで底を確認した。検出面からの深さは1.98ｍである。重機掘削中に横方向の板材２点確認したが残存状況は悪い。木組みの可能性がある。板材はいずれもヒノキである。埋土下層は粗砂を含むシルトや細砂を含む粘質シルトなど（図版11－12～14層）である。中層は細砂と粗砂を含むシルトの粘質土（図版11－10・11層）、上層は粗砂を含むシルトや粘質の細砂などで、土師器や瓦器の鍋など９Ｂ・Ｃ段階の土器類がまとまって出土した（図版11－６～９層）。底は灰白色のシルトから極細砂の基盤層で、砂礫層は見られず、湧水層には達していないと考えられる。水溜の可能性がある。

井戸480（図版11・16）　調査区北東部で検出した。円形石組井戸である。掘形は長径約1.2ｍのいびつな円形を呈する。石組の内径は約0.5ｍある。石材はチャートが中心で砂岩系が若干みられる。北東部は井戸879の掘形を利用して石を積み上げていた。人力掘削で検出面から約0.8ｍまで掘り下げ、調査終了時に重機で掘り下げ、標高75.7ｍで底を確認した。検出面からの深さは1.98ｍである。埋土から９Ｃ段階の土器類がまとまって出土した。底は井戸879と同様の灰白色のシルトから極細砂の基盤層で、砂礫層は見られず、湧水層に達していないと考えられる。水溜の可能性がある。

石列892（図版11・16）　調査区北東部で検出した。井戸480に付属する。井戸480の南側に半径約1.1ｍの半円形状に石が一段据えられている。

土坑880（図版11・16）　調査区北東部で検出した。井戸480に付属する。平面形は楕円形を呈し、検出長は東西約0.4ｍ、南北約0.7ｍある。長辺約0.2ｍ大の石が詰められている。

土坑633（図版17）　調査区東端で検出した。北側は近世の土坑により削平されている。検出長は東西約1.2ｍ、南北約0.5ｍ以上ある。深さは最大で検出面から約0.26ｍある。埋土から９Ｃ段階の土師器の皿がまとまって出土した。

土坑882（図版11・17）　調査区北東部で検出した。平面形は楕円形を呈し、検出長は東西約0.9ｍ、南北約1.1ｍある。深さは最大で検出面から約0.29ｍある。埋土には0.1～0.2ｍ大の石が多く含まれている。土坑南寄りに、長辺約0.2ｍの石と瓦器の鍋が伏せて置かれていた。鍋の底部は失われている。鍋内部で金属製品を確認したが、酸化が激しく取り上げることができなかった。

柱穴724　掘形の平面形は径0.43ｍの円形を呈し、深さは約0.23ｍある。室町時代の土器類と平安時代の土師器皿が１点出土した。

３）江戸時代の遺構

溝306　調査区中央で検出した。南北方向の溝である。検出長は約8.5ｍで、幅は0.5～0.65ｍある。検出面からの深さは約0.37ｍである。溝底の標高は北端が77.49ｍ、南端が77.16ｍで、南が北より低い。埋土は径0.5㎝の礫を含む細砂と粗砂を含むシルト（図版４－南壁18・19層）である。埋土からは江戸時代の土器類が出土した。

溝536　調査区中央で検出した。北から南方向の溝である。検出長は約11.5ｍで、幅は0.5～0.6

mある。検出面からの深さは約0.4mである。溝底の標高は北端が77.37m、南端が76.87mで、南が北より低い。埋土は径0.5cmの礫を含む粘質シルトと粗砂を含むシルト（図版４－南壁21・22層）である。埋土からは江戸時代の土器類が出土した。

（４）３区の遺構（図版５・18）

１）鎌倉時代の遺構

柱穴13（図版19）　調査区中央で検出した。掘形の平面形は径0.3mの円形を呈し、深さは約0.16mある。吉備系土師器の椀が１点出土した。

柱穴58　調査区中央南側で検出した。掘形の平面形は径0.45mの楕円形を呈し、深さは約0.07mある。柱当で平瓦と軒平瓦を検出した。根固めとして利用されたと考えられる。

土坑49（図版19）　調査区南東部で検出した。掘形の平面形は径0.5mの円形を呈し、深さは約0.15mある。土坑の中央に完形の瓦器鍋が伏せて置かれていた。

土坑72　調査区南東部で検出した。平面形は楕円形である。北西部は削平されている。検出規模は東西約0.6m、南北約0.8mある。深さは最大で検出面から約0.22mある。埋土から７Ｂ段階の土器類がまとまって出土した。

土坑66（図８）　調査区西端で検出した。西側は調査区外に続き、南側は削平される。検出規模は、東西約0.4m以上、南北2.4m以上ある。深さは最大で検出面から約0.12mある。

井戸33（図版19）　調査区中央北端で検出した。北側は調査区外に続く。素掘りの井戸である。掘形は長径約1.4mのいびつな円形を呈する。標高76.03mで底を確認した。検出面からの深さは1.45mである。底から0.2m上で、２枚の土師器皿とその上に0.2m大の石を検出した。埋土から７Ｃ段階の土器類が出土した。底は２区の井戸480・479と同様に粗砂混じりのシルトの基盤層（図版６－46層）であり、湧水層に達しているとは考えにくいため、水溜の可能性がある。

溝４（図版18・19、図８）　調査区西側で検出した。北から南方向の溝である。南側が削平され

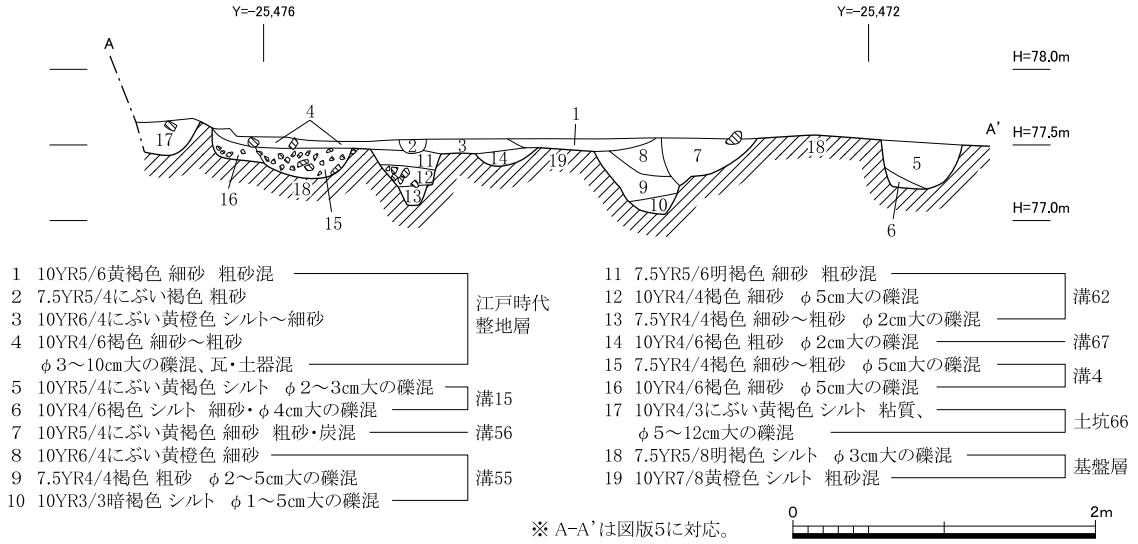


図８　３区溝4・15・55・56・62・67、土坑66断面図（１：50）

る。検出長は約2.9ｍで、幅は0.9～1.1ｍある。検出面からの深さは0.12～0.4ｍである。溝底の標高は北端が77.43ｍ、南端が77.38ｍで、南が北より低い。埋土は径５㎝の礫混じりの細砂から粗砂（図８－15・16層）である。埋土からは７Ｂ段階の土器類が出土した。

溝62（図版18、図８）　調査区西側で検出した。北から南方向の溝である。南側が削平される。検出長は約3.65ｍで、幅は0.4～0.6ｍ。断面形状は逆台形を呈する。検出面からの深さ0.25～0.49ｍである。溝底の標高は北端が77.32ｍ、南端が77.00ｍで、南が北より低い。埋土は径５㎝の礫・粗砂を含む細砂など（図８－11～13層）である。埋土からは７Ｃ段階の土器類が出土した。

溝67（図版18、図８）　調査区西側で検出した。北西から南東方向の溝である。北西部は溝62に削平される。検出長は約3.65ｍで、幅は0.30～0.55ｍある。検出面からの深さは約0.10～0.21ｍである。溝底の標高は北西端が77.42ｍ、南東端が77.29ｍで、南東が北西より低い。埋土は径２㎝の礫を含む粗砂（図８－14層）である。埋土からは６Ｂ～Ｃ段階の土器類が出土した。

溝55（図版18、図８）　調査区西側で検出した。北から南方向の溝である。南東部の上部は溝56に削平され、南側も削平される。検出長は約4.15ｍで、幅は0.55～0.85ｍ。検出面からの深さ0.15～0.4ｍである。溝底の標高は北端が77.12ｍ、南端が77.07ｍで、南が北より低い。埋土は径２～５㎝の礫混じりの粗砂、細砂など（図８－８～10層）である。埋土からは７Ｂ段階の土器類が出土した。

２）室町時代の遺構

溝15（図版18、図８）　調査区西側で検出した。北東から南西方向の溝である。南側は削平される。検出長は約3.65ｍで、幅は0.30～0.55ｍある。検出面からの深さは約0.21～0.28ｍである。溝底の標高は北東端が77.29ｍ、南西端が77.25ｍで、南西が北東より若干低い。埋土は径２～３㎝の礫を含むシルトなど（図８－５・６層）である。埋土からは９Ｃ段階の土器類が出土した。

溝56（図版18、図８）　調査区西側で検出した。北東から南西方向の溝である。南側は削平される。検出長は約17.6ｍで、幅は2.0～3.2ｍある。検出面からの深さは約0.13～0.26ｍである。溝底の標高は北東端が77.45ｍ、南西端が77.20ｍで、南西が北東より低い。埋土は粗砂を含む細砂（図８－７層）である。埋土からは９Ｃ段階の土器類が出土した。

溝42　調査区北端で検出した。東から西方向の溝である。溝の北側と東側は調査区外に続き、南肩を検出した。検出長は約7.8ｍ以上で、幅は0.55～0.85ｍ。検出面からの深さ約0.1ｍである。溝底の標高は東端が77.26ｍ、西端が77.40ｍで、東が西より低い。埋土は径2㎝の礫混じりのシルト（図版６－14層）である。溝42は井戸33の上部を削平している。

柱穴７　調査区南西部で検出した。掘形の平面形は径0.45ｍの円形を呈し、深さは約0.1ｍある。長辺0.2ｍ程の石が据えられていた。溝62・67が埋められた後に造られた遺構である。

４．遺　　物

（１）遺物の概要

調査では、整理コンテナに45箱出土した。出土遺物には土器類、瓦類、石製品などがある。土器が約９割を占める。遺物の帰属時期は、旧石器時代から江戸時代の各時代である。鎌倉時代から室町時代の遺物が約８割を占める。

旧石器時代から縄文時代頃の剥片が２区の土坑469から出土した。平安時代の遺物は土師器皿と瓦類があるが、いずれも後世の遺構（柱穴359・724、土坑880など）から出土した。鎌倉時代の遺物は３区の溝４・55・62・67を中心に出土した。３区の柱穴13からは、13世紀後半から14世紀初頭頃の吉備系土師器の椀が出土した。室町時代の遺物は、２区の井戸480・879からまとまって出土した。江戸時代の遺物は、１区の溝123・175、土坑124を中心に出土し、施釉陶器の禁裏御用品の小片が１点出土した。

以下、種類ごとに遺物の概要を述べる。土師器皿の型式・年代については、平尾政幸氏の編年に拠る[1)]。

（２）土器類（図版12・13・20・21、図９・10、付表１）

１）鎌倉時代の土器（図版12・20）

柱穴499（２区）出土土器（１）　瓦器の椀である。摩滅しており調整不明瞭。平安時代末から鎌倉時代の土器と考えられる。

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
旧石器時代～縄文時代	石器		剥片１点		
平安時代	土師器、瓦類		瓦類８点		
鎌倉時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶椀、瓦器、白色土器、土師質土器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品		土師器24点、須恵器２点、瓦器８点、白色土器１点、土師質土器１点、輸入陶磁器５点、瓦類４点、石製品４点		
室町時代	土師器、須恵器、山茶椀、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、金属製品、石製品		土師器31点、須恵器２点、瓦器９点、焼締陶器１点、施釉陶器８点、輸入陶磁器９点、石製品２点		
江戸時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、瓦類、金属製品、石製品		施釉陶器１点		
合　計		63箱	121点（16箱）	２箱	45箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａ・Ｂランクの遺物を抽出したため、出土時より18箱多くなっている。

１区精査中出土土器（２）　白色土器の高杯脚部である。外面を面取りする。

柱穴13（３区）出土土器（３）　土師器の椀である。草戸千軒町遺跡Ⅰ期後半（13世紀後半から14世紀初頭）頃の吉備系土師器である[2)]。

溝181（１区）出土土器（４～７）　４～６は土師器の皿である。４・５は皿S、６は皿Nである。７は須恵器の鉢である。

土坑205（１区）出土土器（８～10）　８・９は土師器の皿である。８は皿S、９は皿Nである。10は輸入磁器の白磁椀である。内面に型押しの花文が施されている。

土坑219（１区）出土土器（11～19）　11～17は土師器の皿である。11は皿Sc、12～14は皿S、15は皿Sh、16・17は皿Nである。18は土師質土器である。形状はトリベ形であるが、金属の付着や比熱痕跡は見られない。19は輸入陶器の壷である。底部に左回転の成形痕がみられ、中国南部で生産された可能性がある。

井戸33（３区）出土土器（20～24）　20・21は土師器の皿Sである。22は瓦器の小型羽釜である。23は瓦器の鍋である。24は輸入磁器の白磁の皿である。

土坑72（３区）出土土器（25～34）　25～29は土師器の皿である。25は皿Sh、26・27は皿S、28・29は皿Nである。30は瓦器の小椀である。31は須恵器の鉢である。32は瓦器の鍋である。33は瓦器の盤である。楠葉産。34は輸入磁器の白磁の合子身である。外面に型押しにより花文が施される。７Ｂ段階頃である。

溝４（３区）出土土器（35～39）　35～37は土師器の皿である。35は皿Sh、36は皿S、37は皿Nである。38は瓦器の鍋である。内面ハケ、外面指おさえ。39は土師器の深鉢である。粘土紐接合痕が明瞭に残り、内面に棒状工具によるナデ痕がある。７Ｂ段階である。

溝62（３区）出土土器（40）　輸入磁器の白磁の皿である。口縁端部は口禿げになり、底部は平底で、内外面に施釉する。口縁端部に漆のようなものが塗られている。13世紀後半から14世紀前半頃に属する資料である。

土坑49（３区）出土土器（41）　瓦器の鍋である。

２）室町時代の土器（図版13・21、図９）

建物４柱穴340（２区）出土土器（42）　輸入陶器の盤である。華南産と考えられる。

建物４柱穴725（２区）出土土器（43）　施釉陶器の瀬戸産の仏花瓶である。14世紀頃である。

土坑633（２区）出土土器（44～46）　44～46は土師器の皿である。44は皿Sb、45・46は皿Sである。９Ｃ段階である。

土坑882（２区）出土土器（47～52）　47～49は土師器の皿である。47は皿Sh、48は皿N、49は皿Sである。50は施釉陶器の卸皿である。瀬戸産。51は瓦器の鍋である。52は輸入磁器の青磁の皿である。同安窯系。９Ｃ段階である。

井戸879（２区）出土土器（53～83）　53～59は掘形、60～83は埋土から出土した。

53～55は土師器の皿である。53は皿Sh、54は皿Sb、55は皿Sである。54は内面全体に煤が付着する。56・57は施釉陶器の卸皿である。瀬戸産。58は瓦器の羽釜である。脚がつく。59は輸入

磁器の青磁盤である。９Ｂ～Ｃ段階である。

60～73は土師器の皿である。60・61は皿Sh、62～65は皿Sb、66～71は皿S、72・73は皿Ｎである。63は内面、外面に煤が付着する。74は土師器の高杯脚部である。75・76は施釉陶器である。瀬戸産。75は入子、76は卸皿である。77は須恵器の鉢の底部である。底部糸切。78～82は瓦器である。78は風炉で、口縁部付近に透かしがある。79は鍋、80～82は羽釜である。80の外面底部には煤が厚く付着する。83は輸入磁器の青白磁の合子蓋である。９Ｂ～Ｃ段階である。

井戸480（２区）出土土器（84～95）　84～95は掘形、96・97は埋土から出土した。

84～88は土師器の皿である。84・85は皿Sb、86～88は皿Ｓである。89は施釉陶器の卸皿である。瀬戸産。90は焼締陶器の甕である。口縁部楕円形の玉縁状となる。備前産。91は東播系須恵器の鉢である。92・93は瓦器である。92は羽釜、93は火鉢。94・95は輸入磁器の青磁椀である。９Ｃ段階である。

96は土師器の皿Ｓである。97は施釉陶器の天目茶椀である。９Ｃ新段階である。

溝56（３区）出土土器（98・99）　98は土師器の皿である。99は輸入磁器の青磁の盤である。９

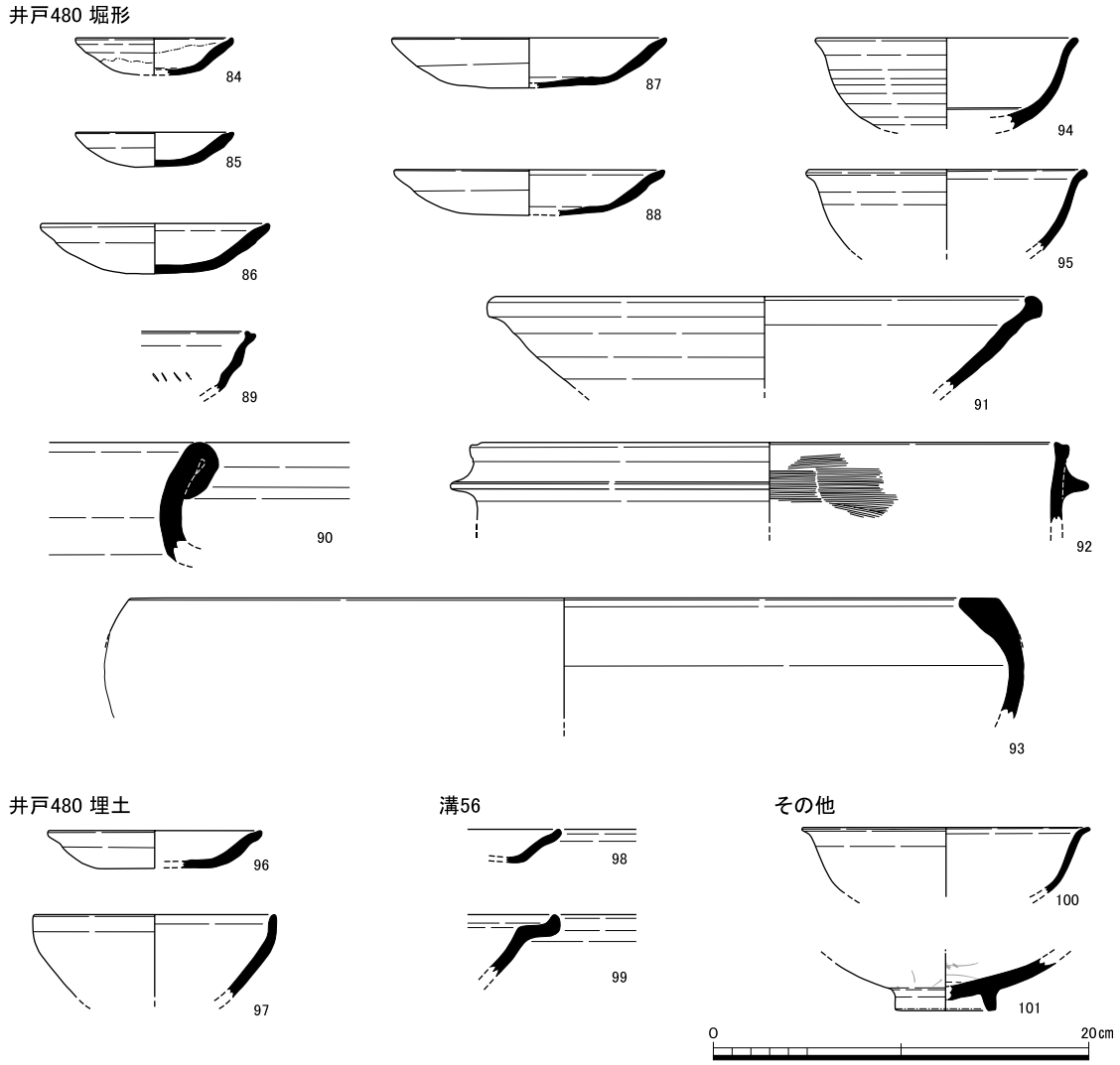


図９　室町時代の土器実測図２（１：４）

C段階である。

その他出土土器（100・101）　100は輸入磁器の白磁の椀である。江戸時代整地層から出土した。混入した遺物である。

101は輸入磁器の青磁の椀である。江戸時代の１区溝175から出土した。混入した遺物である。

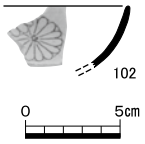


図10　江戸時代の土器実測図（１：４）

３）江戸時代の土器（図10）

１区江戸時代整地層出土土器（102）　施釉陶器の椀である。内面に13弁の菊文が重ねて描かれている。粟田焼でいわゆる禁裏御用品である。

（３）瓦類（図版22、図11、付表２）

瓦の種類は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦と、軒桟瓦、塼などである。軒瓦の内訳は、軒丸瓦４点、軒平瓦７点、総数11点である。なお、個々の瓦類の詳細については、付表２に掲載した。

軒瓦（瓦１～10）　軒丸瓦は４点出土した。文様は蓮華文が１点、巴文が２点、不明が１点である。文様の判別が可能な３点を報告する。瓦１は蓮華文軒丸瓦である。南都系。瓦２は右巻三巴文。瓦３は左巻三巴文。いずれも小型、山城産。

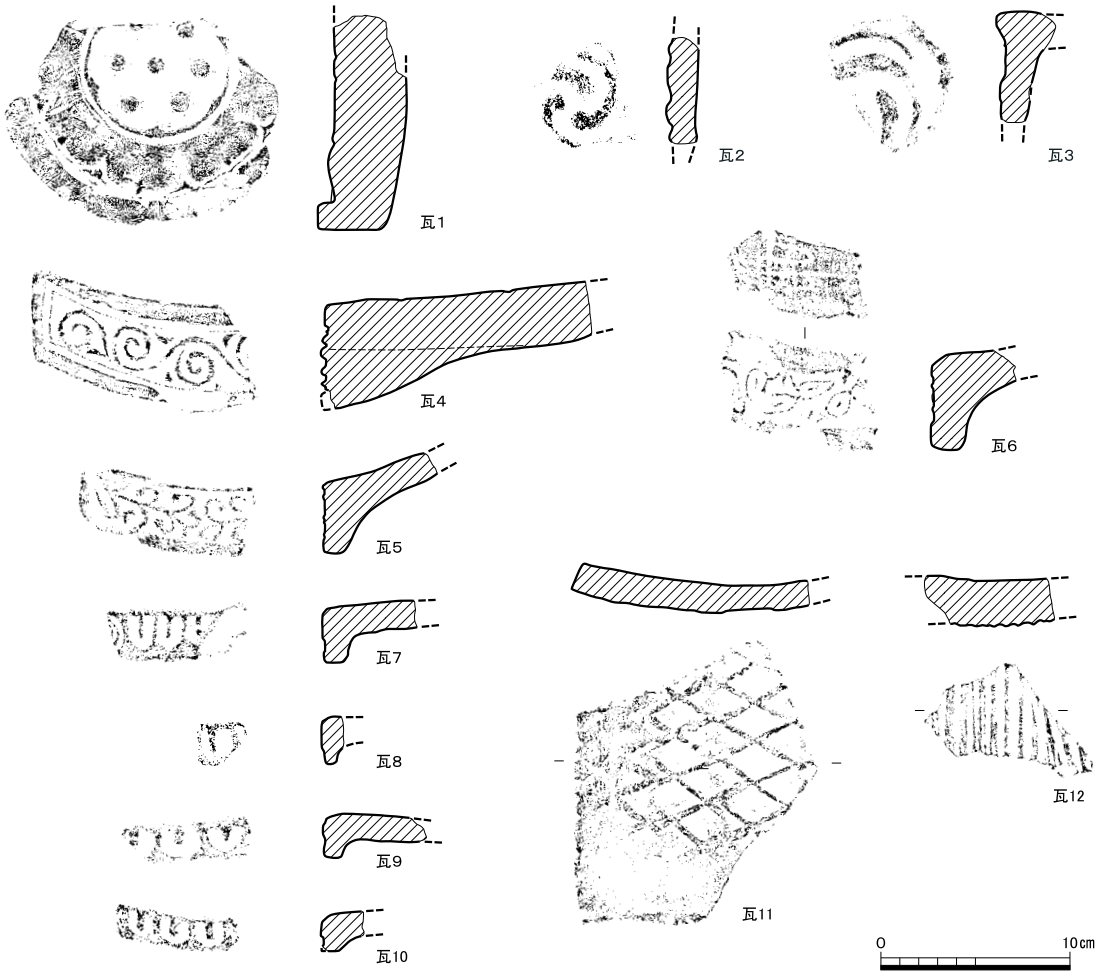


図11　瓦類拓影及び実測図（１：４）

軒平瓦は７点出土した。文様は、唐草文が２点、半裁花文が１点、剣巴文が１点、剣頭文３点である。瓦４は、偏行唐草文。法金剛院や仁和寺出土例の文様と類似する。南都産。瓦５は唐草文。外区なし。半折り曲げ成形。平安京左京四条一坊一町、南ノ庄田瓦窯跡と同文。山城産。瓦６は半裁花文。半折り曲げ成形。山城産。瓦７は巴剣頭文。折り曲げ成形。瓦８～10は剣頭文、折り曲げ成形。山城産。瓦10は瓦当面に布目がみられる。

平瓦（瓦11・12）　瓦11・12は平瓦である。瓦11の凹面は布目、凸面は斜格子目のタタキで仕上げられる。３区の柱穴７から出土した。瓦12の凹面は布目、凸面は平行タタキで仕上げられる。１区の土坑205から出土した。

（４）石製品（図版22、図12、付表３）

調査では滑石製の石製品６点、硯１点、砥石７点、碁石２点、石臼１点、剥片１点が出土した。

滑石製石製品については、遺存状況の良い３点（石１～３）を図示した。石１の石鍋外面には煤が付着する。３区掘削中に出土した。石２は口縁部や羽部が厚い。３区溝67から出土した。石３は煤の付着があり、石鍋の転用と考えられる。石には穴が開けられており、温石として再利用されたと考えられる。１区土坑219から出土した。

石４は硯である。３区溝４から出土した。

石５・６は砥石である。いずれも仕上げ用の砥石と考えられる。石５は３区井戸33から出土した。石６は２区井戸879の埋土から出土した。

石７は２次加工のある剥片である。石材はチャートである。石側面には一部自然面が残る。時代は旧石器時代から縄文時代と考えらえる。鎌倉時代の２区土坑469から出土した。

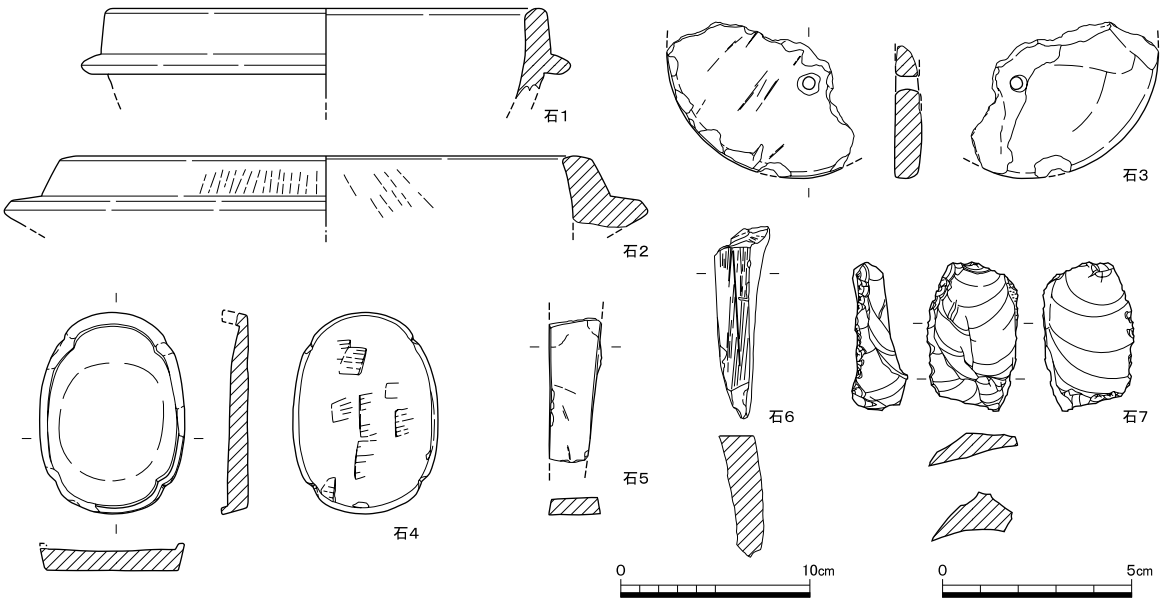


図12　石製品実測図（１：４、石７のみ１：２）

註

1） 鎌倉時代以降の土師器皿の型式・年代については、平尾政幸「土師器再考」『洛史　研究紀要　第12号』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年に準拠する。

750年　840年　930年　1020年　1110年　1170年　1260年　1350年　1410年　1500年　1590年　1680年　1740年　1800年　1860年

1			2			3			4			5		6			7			8		9			10			11			12		13		14	
A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	A	B

その他土器類の参考文献は、中世土器研究会編『新版 概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社　2022年、太宰府市教育委員会編『太宰府市の文化財 第49集　大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』 太宰府市教育委員会　2000年、赤松佳奈「京都出土中国産陶磁器の形・質・割合とその背景（２－２）－量と質の変様－」『京都市文化財保護課研究紀要　第６号』 京都市文化財保護課　2022年

2） 鈴木康之「Ｂ 土師質土器の編年」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ｖ－中世瀬戸内の集落遺跡』 広島県教育委員会

５．まとめ

今回の調査では、鎌倉時代から江戸時代の遺構、旧石器時代から江戸時代の遺物を確認した。調査地は、衣笠山の西南麓に位置し、全体地形は北から南へ傾斜する。本調査の１・２区の基盤層を比較すると北より南が約1.2ｍ低くなる。以下では、比較的まとまった成果を得た平安時代から江戸時代の様相について記す。

平安時代　今回の調査地では平安時代中期の土師器皿を２点、平安時代中・後期の軒丸瓦及び軒平瓦を確認したが、その時期の遺構を確認することはできなかった。

鎌倉時代　１区南端で東西方向の溝181・182、中央で土坑219を、２区東側で建物２、柱穴列２、土坑636、西端で建物３を、３区北端で井戸33、西端で南北方向の溝４・55・62・67、土坑66、南端で土坑49・72を検出した。建物２・３はほぼ同規模の建物である。建物及び柱穴列は北に対して西に２度振れる。溝や柵によって区画された敷地に井戸や建物が展開していたと考えられる。

室町時代　１区西側で建物１と柱穴列１を、２区西端で建物４、柱穴列３、柱穴724、北東部で井戸480・879、土坑633・882を、３区中央で溝15・56、北端で東西方向の溝42を検出した。建物１・４は鎌倉時代の建物２・３より規模が大きい建物である。建物及び柱穴列は北に対して東に２度振れる。２区では柱穴群が調査区西側に集中して確認され、東側では井戸を確認している。溝や柵によって区画された敷地の西側に建物があり、東側に井戸などの施設を持つ配置が考えられる。

江戸時代　１区中央で南北方向の溝123・175、土坑124を、２区中央で南北方向の溝306・536を検出した。

１～３区で確認した東西・南北方向の溝は、鎌倉時代から室町時代までほぼ同一箇所に何度も掘削された。また１区の南端では、溝181・182が埋没した後、溝上に柱穴列１を確認した。これらのことから、土地境界が鎌倉時代から室町時代にかけて維持されていたことがわかる。また、同一箇所に江戸時代の溝は検出されず、江戸時代の土地境界は鎌倉時代や室町時代とは異なっており、変化している。

今回の調査と既存の調査結果をふまえると、平安時代の遺構・遺物は、図７－調査５、調査８－①・②で確認している。鎌倉時代になると前時代の分布に重なりつつ、図７－調査５、調査８－②、今回調査でも遺構・遺物を確認し、範囲は拡大傾向にある。室町時代になると分布範囲はさらに広がり、図７－調査５、調査８－②・③・④、今回調査でも確認している。

今回の調査成果で、鎌倉時代の建物と共に溝や柵による区画を確認し、室町時代になると前段階の土地区画を踏襲しつつ、遺構・遺物が増加する点は注目される。調査地が、宝徳２年（1450）に龍安寺が建立され龍安寺門前村と呼ばれるようになる以前、居住域としての土地利用の始まりが鎌倉時代であることが明らかとなった。

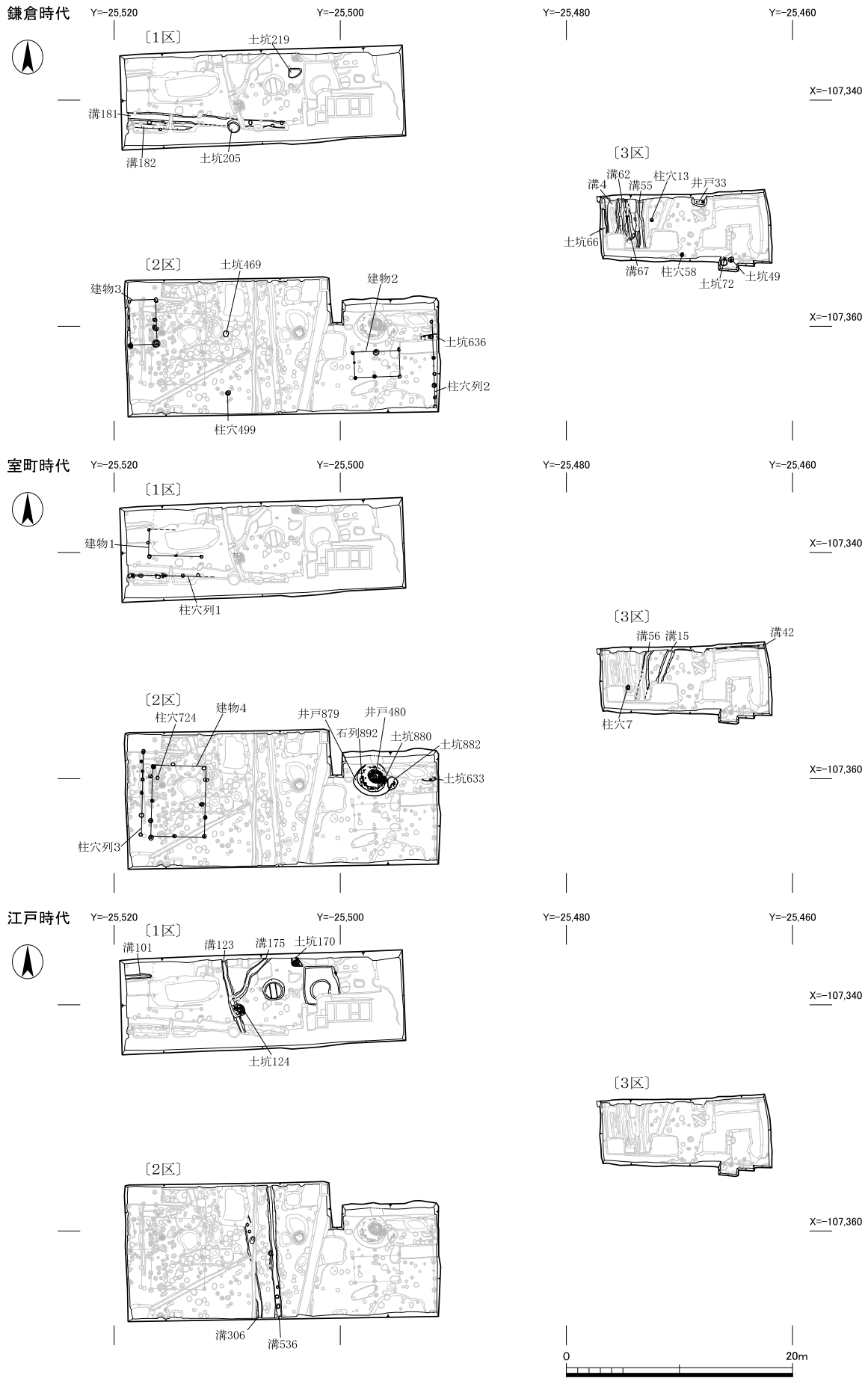


図13　遺構変遷図（1：500）

付表１　土器一覧表

※（ ）は残存数値

No.	器種	器形	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	胎土色調	備考
1	瓦器	椀	2区　柱穴499	15.2	6.0	5.5	90	N4/0灰色	
2	白色土器	高杯	1区　精査中		(10.3)		脚柱部60	2.5Y8/2灰白色	
3	土師器	椀	3区　柱穴13	12.4	4.4		40	10YR8/2灰白色	吉備系
4	土師器	皿S	1区　溝181		2.6		口縁12	10YR8/2灰白色	
5	土師器	皿S	1区　溝181	12.6	3.1		25	10YR8/2灰白色	
6	土師器	皿N	1区　溝181	12.9	(2.0)		口縁25	10YR7/4にぶい黄橙色	
7	須恵器	鉢	1区　溝181		(3.8)		口縁12	N6/0灰色	
8	土師器	皿S	1区　土坑205	13.0	(2.7)		口縁16	10YR8/2灰白色	
9	土師器	皿N	1区　土坑205	8.1	1.4		90	10YR7/4にぶい黄橙色	
10	輸入磁器 白磁	椀	1区　土坑205	13.5	(3.6)		口縁16	胎土:N9/0白色　釉:N9/0白色	
11	土師器	皿Sc	1区　土坑219	6.5 8.7	1.6		60	7.5Y8/2灰白色	
12	土師器	皿S	1区　土坑219	6.5	1.7		98	2.5Y8/2灰白色	
13	土師器	皿S	1区　土坑219	6.5	1.6		60	10YR8/2灰白色	
14	土師器	皿S	1区　土坑219	11.6	2.9		40	10YR8/2灰白色	
15	土師器	皿Sh	1区　土坑219	7.0	1.8		100	2.5Y8/1灰白色	
16	土師器	皿N	1区　土坑219	7.7	1.7		60	2.5Y7/2灰黄色	
17	土師器	皿N	1区　土坑219	11.2	2.1		80	7.5YR7/4にぶい橙色	
18	土師質土器	鉢形	1区　土坑219		3.0	4.6	底部100	7.5YR7/4にぶい褐色	トリベか
19	輸入陶器	壷	1区　土坑219		(21.2)	6.5	底部100	胎土:10YR7/2にぶい黄橙色　釉:7.5YR6/2灰褐色	二次被熱
20	土師器	皿S	3区　井戸33	11.4	(0.9)		25	2.5Y8/2灰白色	
21	土師器	皿S	3区　井戸33	10.8	(2.5)		40	10YR8/2灰白色	
22	瓦器	羽釜	3区　井戸33	12.0	(3.4)		16	10Y8/3浅黄橙色	小型
23	瓦器	鍋	3区　井戸33	29.8	(2.9)		小片	10YR5/2灰黄褐色	
24	輸入磁器 白磁	皿か	3区　井戸33	10.2	(1.6)		小片	胎土:N8/0灰色　釉:7.5GY8/1灰白色	
25	土師器	皿Sh	3区　土坑72	6.8	1.8		100	10YR8/3浅黄橙色	
26	土師器	皿S	3区　土坑72	12.1	2.5		60	2.5Y8/3淡黄色	
27	土師器	皿S	3区　土坑72	12.0	2.9		40	2.5Y8/3淡黄色	
28	土師器	皿N	3区　土坑72	8.2	1.5		100	7.5YR7/4にぶい橙色	
29	土師器	皿N	3区　土坑72	8.0	1.3		60	7.5YR7/4にぶい橙色	
30	瓦器	椀	3区　土坑72	7.8	2.6	3.2	20	7.5YR7/4にぶい橙色	
31	須恵器	鉢	3区　土坑72	26.6	(7.1)		12	N6/0灰色	東播系
32	瓦器	鍋	3区　土坑72	20.9	(5.3)		12	10YR7/2にぶい黄橙色	
33	瓦器	盤	3区　土坑72	31.4	(8.2)		16	10YR7/3にぶい黄橙色	楠葉産
34	輸入磁器 白磁	合子身	3区　土坑72	6.2	2.8	4.2	40	胎土:2.5Y8/1灰白色　釉:5Y6/2灰オリーブ色	
35	土師器	皿Sh	3区　溝4	6.7	2.0		60	10YR8/1灰白色	
36	土師器	皿S	3区　溝4	8.6	2.3		40	2.5Y8/2灰白色	

※（ ）は残存数値

No.	器種	器形	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	胎土色調	備考
37	土師器	皿N	3区 溝4	11.8	(2.0)		20	10YR7/3にぶい黄橙色	
38	瓦器	鍋	3区 溝4	27.2	(4.1)		口縁8	N3/0暗灰色	
39	土師器	深鉢	3区 溝4	13.8	(8.7)		口縁70	10YR7/4にぶい黄橙色	
40	輸入磁器 白磁	皿	3区 溝62	10.5	1.9	6.4	98	胎土:N9/0白色 釉:うすい明緑灰色	口縁部漆付着
41	瓦器	鍋	3区 土坑49	25.9	(11.3)		60	N6/0灰色	
42	輸入陶器	盤	2区 建物4 柱穴340		(1.6)	18.8	底部12	胎土:5Y7/1灰白色 釉:7.5Y4/3暗オリーブ色	華南産か
43	施釉陶器	仏花瓶	2区 建物4 柱穴725		(4.5)	6.3	底部80	胎土:10YR8/3浅黄橙色 釉:5Y2/2オリーブ黒色	瀬戸産
44	土師器	皿Sb	2区 土坑633	8.2	1.8		100	7.5YR8/4浅黄橙色	
45	土師器	皿S	2区 土坑633	11.8	2.2		80	7.5YR8/4浅黄橙色	
46	土師器	皿S	2区 土坑633	14.6	2.5		60	7.5YR7/6橙色	
47	土師器	皿Sh	2区 土坑882	6.4	1.6		83	7.5YR7/6橙色	
48	土師器	皿N	2区 土坑882	6.3	1.6		80	7.5YR7/4にぶい橙色	
49	土師器	皿S	2区 土坑882	14.8	2.5		44	7.5YR8/4にぶい浅黄橙色	
50	施釉陶器	卸皿	2区 土坑882		(2.6)		16	胎土:10YR8/2灰白色 釉:7.5Y6/3オリーブ黄色	
51	瓦器	鍋	2区 土坑882	28.4	(9.8)		50	N5/0灰色	
52	輸入磁器 青磁	皿	2区 土坑882		(1.4)	3.0	25	胎土:2.5Y8/2灰白色 釉:10Y7/1灰白色	同安窯
53	土師器	皿Sh	2区 井戸879(掘形)	6.6	2.1		40	10YR8/2灰白色	
54	土師器	皿Sb	2区 井戸879(掘形)	8.4	1.9		80	7.5YR8/4浅黄橙色	煤付着
55	土師器	皿S	2区 井戸879(掘形)	11.8	2.2		25	7.5YR7/3にぶい橙色	
56	施釉陶器	卸皿	2区 井戸879(掘形)		(2.2)		口縁12	胎土:5Y8/1灰白色 釉:10Y7/2灰白色	瀬戸産
57	施釉陶器	卸皿	2区 井戸879(掘形)		(1.9)		口縁10	胎土:2.5Y7/2灰黄色 釉:5Y5/4オリーブ色	瀬戸産
58	瓦器	羽釜	2区 井戸879(掘形)	8.0	(6.3)		16	N2/0黒色	小型
59	輸入磁器 青磁	盤	2区 井戸879(掘形)	28.4	(3.3)		口縁8	胎土:5Y8/2灰白色 釉:10Y6/2オリーブ灰色	
60	土師器	皿Sh	2区 井戸879(埋土)	6.4	1.5		100	7.5YR8/4浅黄橙色	
61	土師器	皿Sh	2区 井戸879(埋土)	6.6	1.5		62	7.5YR7/6橙色	
62	土師器	皿Sb	2区 井戸879(埋土)	8.0	1.7		100	10YR8/4浅黄橙色	
63	土師器	皿Sb	2区 井戸879(埋土)	8.2	1.7		90	10YR6/2灰黄褐色	
64	土師器	皿Sb	2区 井戸879(埋土)	8.8	2.2		98	7.5YR8/4浅黄橙色	
65	土師器	皿Sb	2区 井戸879(埋土)	8.9	1.7		50	10YR7/2にぶい黄橙色	煤付着
66	土師器	皿S	2区 井戸879(埋土)	11.8	2.5		83	7.5YR8/4浅黄橙色	
67	土師器	皿S	2区 井戸879(埋土)	12.3	2.4		40	7.5YR8/3浅黄橙色	
68	土師器	皿S	2区 井戸879(埋土)	14.0	2.6		25	7.5YR7/4にぶい橙色	
69	土師器	皿S	2区 井戸879(埋土)	14.8	2.5		40	7.5YR8/4浅黄橙色	
70	土師器	皿S	2区 井戸879(埋土)	14.8	2.4		41	5YR7/4にぶい橙色	
71	土師器	皿S	2区 井戸879(埋土)	14.8	2.2		25	7.5YR8/3浅黄橙色	
72	土師器	皿N	2区 井戸879(埋土)	8.0	1.6		90	7.5YR7/2明褐灰色	

※（ ）は残存数値

No.	器種	器形	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	胎土色調	備考
73	土師器	皿N	2区 井戸879(埋土)	9.8	2.0		91	7.5YR7/6橙色	
74	土師器	高杯	2区 井戸879(埋土)		(4.7)		脚柱部33	7.5YR8/6浅黄橙色	
75	施釉陶器	入子	2区 井戸879(埋土)		(1.4)	3.8	底部100	胎土:10YR8/1灰白色	瀬戸産 内面朱付着
76	施釉陶器	卸皿	2区 井戸879(埋土)		(2.8)		小片	胎土:2.5Y8/2灰白色　釉薬:5Y6/3オリーブ黄色	瀬戸産
77	須恵器	鉢	2区 井戸879(埋土)		(4.6)	8.0	底部60	2.5Y7/1灰白色	
78	瓦器	風炉	2区 井戸879(埋土)	28.0	(5.2)		12	N3/0暗灰色、10YR7/2にぶい黄橙色	
79	瓦器	鍋	2区 井戸879(埋土)	29.6	(12.4)		88	10YR6/1褐灰色	煤付着
80	瓦器	羽釜	2区 井戸879(埋土)	24.0	15.8		60	10YR7/2にぶい黄橙色	煤付着
81	瓦器	羽釜	2区 井戸879(埋土)	24.8	(7.9)		口縁75	10YR8/2灰白色	
82	瓦器	羽釜	2区 井戸879(埋土)	25.0	(12.5)		33	2.5Y8/2灰白色	煤付着
83	輸入磁器 青白磁	合子(蓋)	2区 井戸879(埋土)	7.9	(1.8)		33	胎土:2.5Y7/2灰黄色　釉:10GY8/1明緑灰色	
84	土師器	皿Sb	2区 井戸480(掘形)	8.2	2.0		87	7.5YR7/4にぶい橙色	
85	土師器	皿Sb	2区 井戸480(掘形)	8.4	1.8		100	7.5YR7/4にぶい橙色	
86	土師器	皿S	2区 井戸480(掘形)	12.1	2.7		60	10YR8/6黄橙色	
87	土師器	皿S	2区 井戸480(掘形)	14.4	2.7		40	5YR7/6橙色	
88	土師器	皿S	2区 井戸480(掘形)	14.2	2.4		40	7.5YR7/4にぶい橙色	
89	施釉陶器	卸皿	2区 井戸480(掘形)		(2.2)		8	胎土:10YR7/2にぶい黄橙色　釉:7.5Y7/2灰白色	瀬戸産
90	焼締陶器	甕	2区 井戸480(掘形)		(6.3)		小片	5YR5/2灰褐色	備前産
91	須恵器	鉢	2区 井戸480(掘形)	28.8	(4.9)		10	2.5Y6/2灰黄色	東播系
92	瓦器	羽釜	2区 井戸480(掘形)	29.8	(4.3)		口縁10	2.5Y7/2灰黄色	
93	瓦器	火鉢	2区 井戸480(掘形)	46.0	(6.4)		口縁12	N3/0暗灰色	
94	輸入磁器 青磁	椀	2区 井戸480(掘形)	13.9	(4.9)		20	胎土:7.5Y7/1灰白色　釉:5GY7/1明オリーブ灰色	
95	輸入磁器 青磁	椀	2区 井戸480(掘形)	15.0	2.8		25	10YR8/4浅黄橙色	
96	土師器	皿S	2区 井戸480(埋土)	11.3	(4.3)		25	胎土:5Y6/1灰色　釉:黄緑色	
97	施釉陶器	天目椀	2区 井戸480(埋土)	12.8	(4.4)		口縁12	胎土:10YR7/2にぶい黄橙色　釉:7.5YR2/2黒褐色	
98	土師器	皿Sh	3区　溝56		(1.8)		小片	7.5YR8/4浅黄橙色	
99	輸入磁器 青磁	盤	3区　溝56		(3.9)		小片	胎土:N8/0灰白色　釉:10Y5/2オリーブ灰色	
100	輸入磁器 白磁	椀	1区江戸時代 整地層	15.4	(3.5)		口縁10	胎土:白色　釉:透明	混入
101	輸入磁器 青磁	椀	1区　溝175		(2.7)	5.4	底部25	胎土5Y8/1灰白色　釉:透明度の高い黄緑色	混入
102	施釉陶器	椀	1区江戸時代 整地層		(3.2)		小片	胎土:2.5Y7/2灰黄色　釉:7.5Y7/2灰黄色	粟田焼 禁裏御用品

付表２　瓦類一覧表

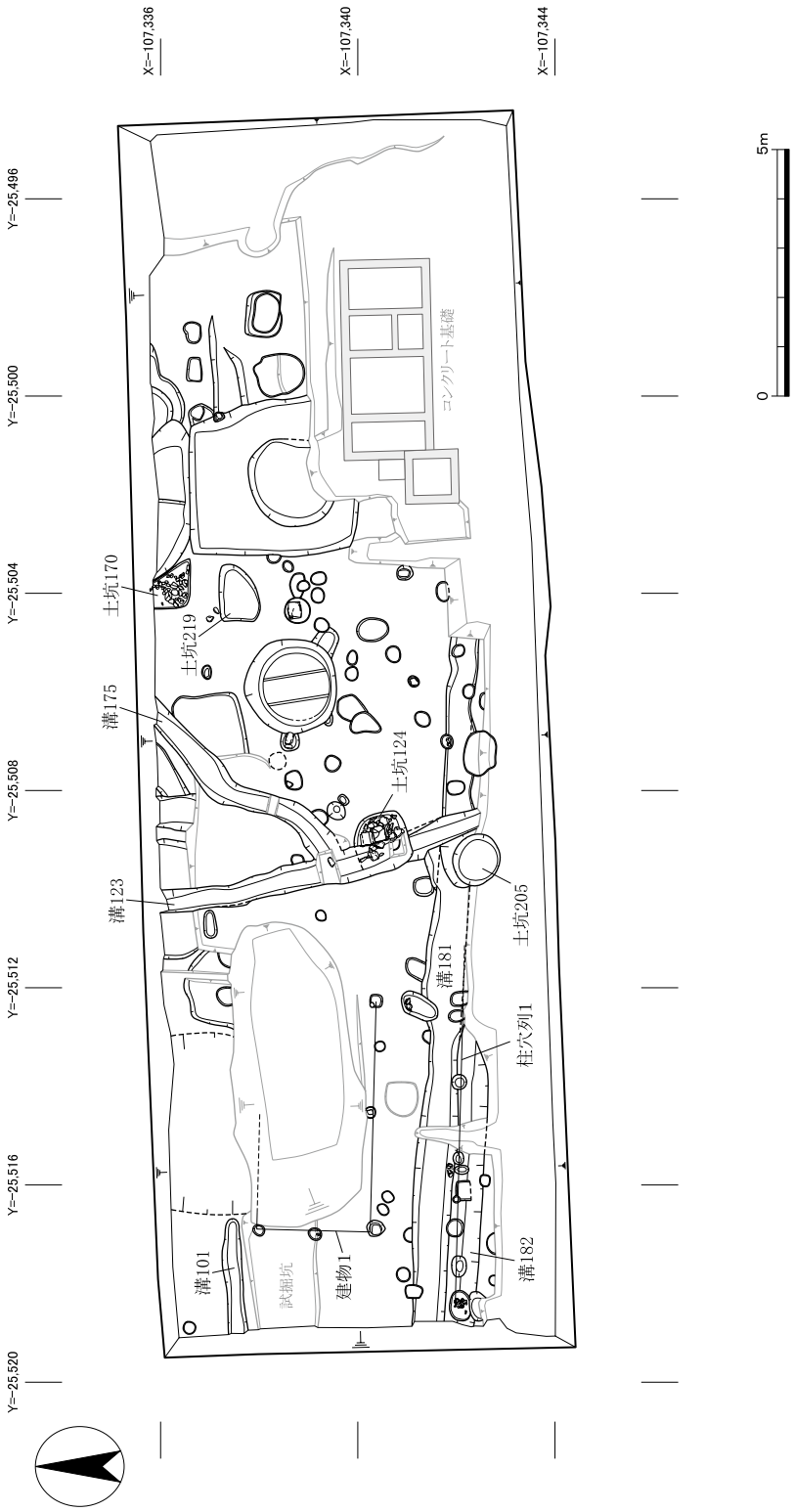
No.	種類	遺構名	瓦当文様の特徴	成形技法の特徴	時期・同笵・同文等
瓦1	軒丸瓦	2区 井戸879	蓮華文	瓦当部裏面・縁部は横ナデ。 側面下半横ナデ。	11世紀　南都産
瓦2	軒丸瓦	3区　溝15	右巻三巴文 巴の頭・尾ともに離れる。	摩滅激しい。瓦当部裏面横ナデか。	12世紀後～13世紀前　山城産
瓦3	軒丸瓦	1区 土坑170	左巻三巴文 巴の頭・尾ともに離れる。	摩滅激しい。瓦当部裏面横ナデか。	12世紀後～13世紀前　山城産
瓦4	軒平瓦	2区 柱穴359	偏行唐草文	直線顎 瓦当上端横ケズリ、下端横ナデ。 顎付近横ナデ。平瓦部凹面布目、凸面縦ナデ。	11世紀　南都産 「11　平安京右京一条四坊・法金剛院境内」『平成8年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1998 図53－16、『仁和寺境内発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第9冊 図版24－132と類似文様
瓦5	軒平瓦	1区 溝181	唐草文	曲線顎　半折り曲げ成形。顎付近横ナデ。 平瓦部凹面糸切痕、布目。	12世紀　山城産 『南ノ庄田瓦窯跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第18冊 MSH04、「7　平安京左京四条一坊」『平成4年度　京都市埋蔵文化財調査概要』図19－11、『木村捷三郎収集瓦図録』図版7－18、13－128、14－140と同文
瓦6	軒平瓦	3区　表採	半裁花文	曲線顎　半折り曲げ成形。 瓦当上端横ケズリ、下端横ナデ。顎部横ナデ。 平瓦部凹面布目、布綴じ目。	12世紀　山城産 『木村捷三郎収集瓦図録』図版34－484と同文
瓦7	軒平瓦	3区　溝62	巴剣頭文	段顎　折り曲げ成形。 瓦当顎部凸面横ナデ。平瓦部凹面布目痕。	12世紀後～13世紀前　山城産
瓦8	軒平瓦	3区 柱穴58	剣頭文	段顎　折り曲げ成形。	12世紀後～13世紀前　山城産
瓦9	軒平瓦	1区 溝123	剣頭文	段顎　折り曲げ成形。 瓦当顎部凸面横ナデ、凹面横ナデ。	12世紀後～13世紀前　山城産
瓦10	軒平瓦	2区 土坑880	剣頭文	段顎　折り曲げ成形。 瓦当顎部凸面横ナデ、凹面横ナデ。 瓦当面に布目。平瓦部凹面布目。	12世紀後～13世紀前　山城産
瓦11	平瓦	3区 柱穴7		凹面布目。凸面斜格子目のタタキ。	『史跡法観寺境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-11　2010
瓦12	平瓦	1区 土坑205		凹面布目。凸面平行タタキ。	『史跡法観寺境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-11　2010

付表３　石製品一覧表

※（　）は残存数値

No.	種類	遺構名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
石1	滑石製石製品	3区　掘削中	口径 22.6	高さ (4.8)	2.5	161.4	滑石	石鍋、外面煤付着
石2	滑石製石製品	3区　溝67	口径 26.0	高さ (3.8)	3.5	196.1	滑石	石鍋
石3	滑石製石製品	1区　土坑219	(8.3)	(9.9)	1.5	180.8	滑石	石鍋、温石転用、外面煤付着、穿孔
石4	硯	3区　溝4	10.7	7.7	1.4	159.6	粘板岩	加工痕跡あり、墨付着
石5	砥石	3区　井戸33	(7.6)	2.8	0.9	27.0	珪質頁岩	
石6	砥石	2区　井戸879(埋土)	(10.2)	(2.9)	(6.4)	128.1	珪質頁岩	切断痕跡あり
石7	2次加工のある剥片	2区　土坑469	3.9	2.4	1.45	11.1	チャート	

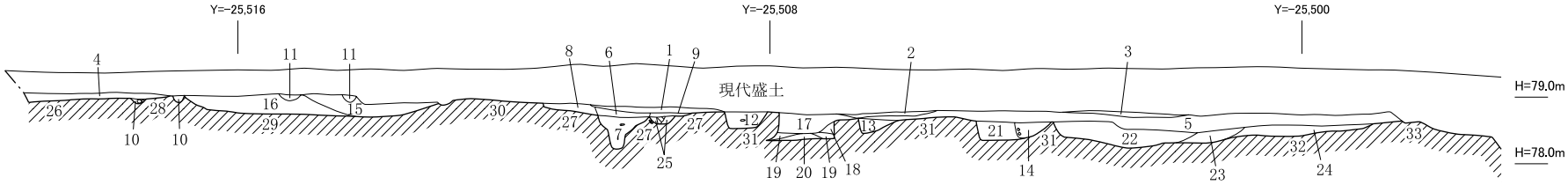
図　　版

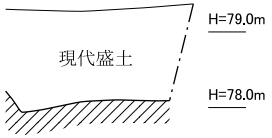

X=-107,336
X=-107,340
X=-107,344
Y=-25,496
Y=-25,500
Y=-25,504
Y=-25,508
Y=-25,512
Y=-25,516
Y=-25,520
0
5m
コンクリート基礎
土坑170
土坑219
溝175
土坑124
溝123
土坑205
溝181
柱穴列1
溝101
試掘坑
建物1
溝182

1区平面図（1：150）

1区北壁・西壁断面図（1：100）

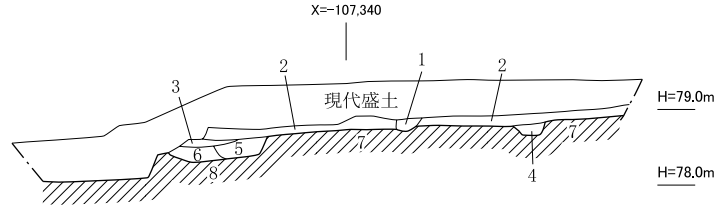
北壁





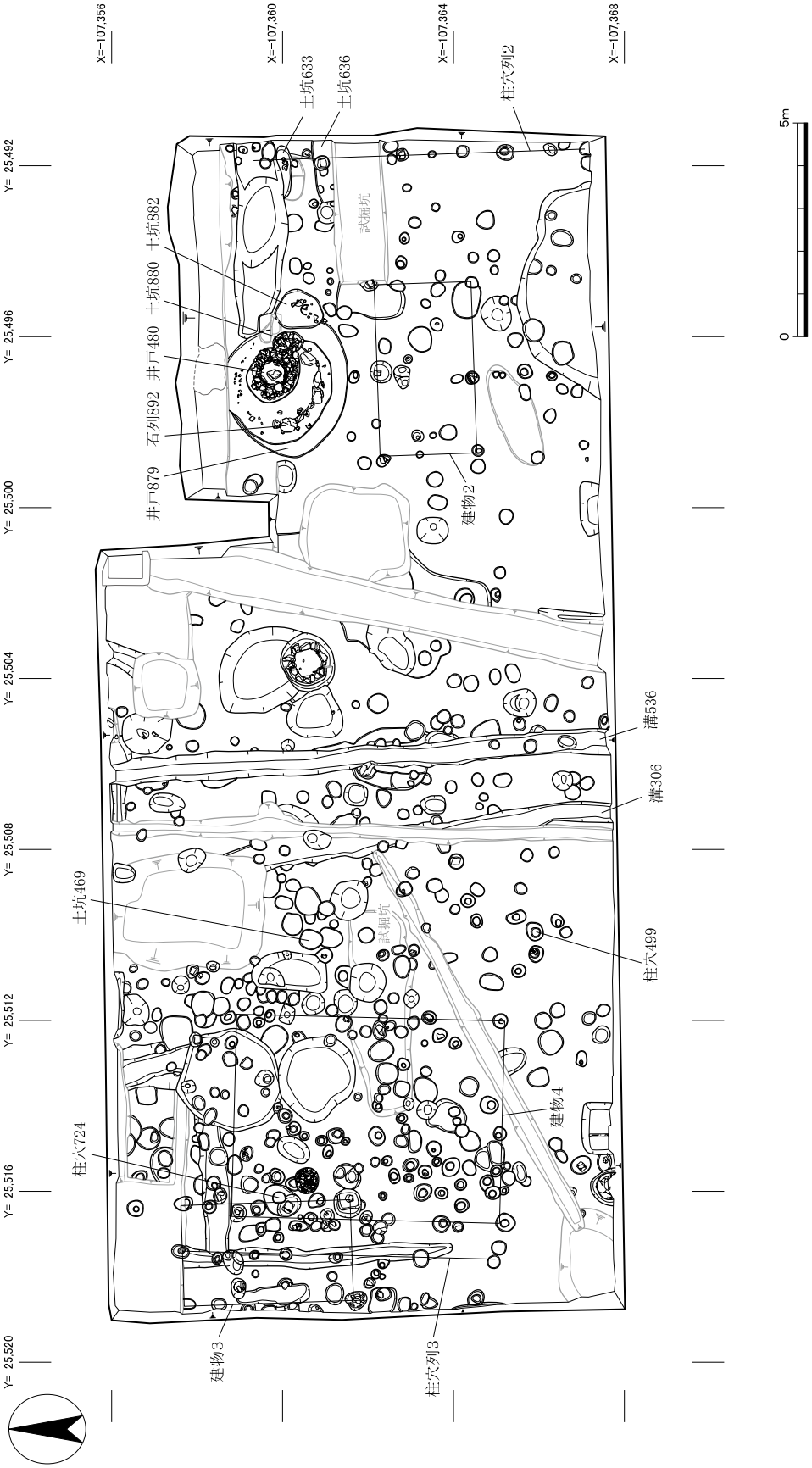
1 10YR6/4にぶい黄橙色 シルト φ1cm大の礫・土器混
2 10YR8/8黄橙色 シルト 固くしまる φ0.3cm大の礫少量混
3 10YR6/8明黄褐色 シルト φ0.3cm大の礫・土器混
4 10YR6/4にぶい黄橙色 シルト～粗砂 φ2cm大の礫混、炭・土器混
5 10YR5/6黄褐色 極細砂 φ0.3～1cm大の礫・土器混
（江戸時代整地層）
6 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト φ1cm大の礫・土器混
7 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 φ2～3cm大の礫・土器混
（溝123）
8 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト φ2cm大の礫混
9 10YR6/6明黄褐色 シルト 細砂混
10 10YR5/6黄褐色 シルト 粗砂混 φ10cm大の礫混 礎石か
11 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト φ1～3cm大の礫混
12 10YR4/4褐色 細砂 φ2～3cm大の礫混（土坑）
13 10YR4/4褐色 シルト 粗砂～φ2cm大の礫混（溝175）
14 10YR4/4褐色 極細砂 φ2cm大の礫混（土坑170）
15 10YR6/4にぶい黄橙色 細砂
16 10YR5/6黄褐色 極細砂～粗砂 φ2～5cm大の礫混
（土坑）
17 10YR4/4褐色 細砂 φ2～3cm大の礫混
18 10YR5/8黄褐色 細砂 φ2cm大の礫混 地山ブロック混
19 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 粘質
20 10YR5/8黄褐色 細砂 地山ブロック混
（土坑）
21 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂 φ2cm大の礫混（土坑）
22 10YR4/1褐灰色 粗砂 φ2cm大の礫混
23 10YR5/4にぶい黄褐色 極細砂 シルト混 土器混
24 10YR5/8黄褐色 極細砂 φ0.5cm大の礫少量混、炭・土器混
（土坑）
25 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト φ2cm大の礫・φ10cm大の礫混（柱穴）
26 10YR6/2灰黄褐色 極細砂
27 10YR6/4にぶい黄橙色 シルト 粗砂～φ1cm大の礫混
28 10YR6/8明黄褐色 シルト φ1cm大の礫混
29 10YR6/8明黄褐色 シルト
30 7.5YR5/8明褐色 シルト φ3～5cm大の礫混
31 10YR5/8黄褐色 シルト φ2cm大の礫混
32 10YR7/8黄橙色 シルト
33 7.5YR5/8明褐色 細砂 φ3～5cm大の礫混
（基盤層）

西壁



1 10YR6/2灰黄褐色 極細砂（土坑）
2 10YR6/4にぶい黄橙色 シルト～粗砂 φ2cm大の礫混、炭・土器混（江戸時代整地層）
3 10YR7/4にぶい黄橙色 シルト φ2cm大の礫混
4 10YR5/3にぶい黄褐色 極細砂 φ3cm大の礫混（溝101）
5 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～細砂 φ2～3cm大の礫混（溝181）
6 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト φ1～2cm大の礫混（溝182）
7 10YR6/3にぶい黄橙色 極細砂 φ2～3cm大の礫混 固くしまる
8 10YR7/8黄橙色 シルト 粗砂混
（基盤層）

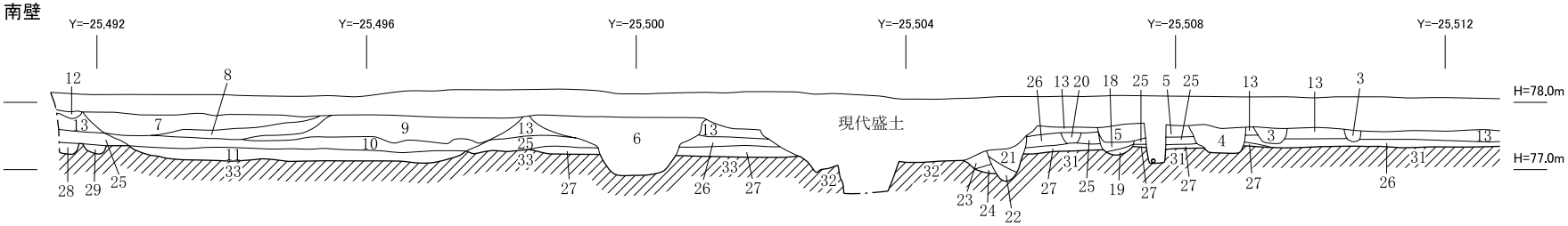
0 5m

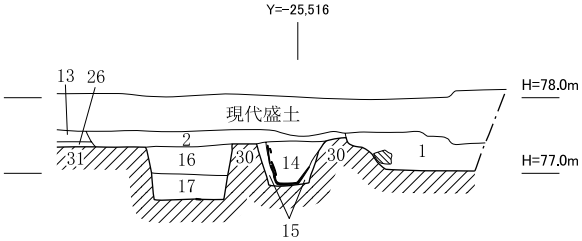

X=-107,356
X=-107,360
X=-107,364
X=-107,368
Y=-25,492
Y=-25,496
Y=-25,500
Y=-25,504
Y=-25,508
Y=-25,512
Y=-25,516
Y=-25,520
土坑633
土坑636
柱穴列2
土坑882
土坑880
井戸480
石列892
井戸879
試掘坑
建物2
溝536
溝306
土坑469
柱穴499
柱穴724
建物4
建物3
柱穴列3
0
5m

2区平面図（1：150）

2区南壁・西壁断面図（1：100）

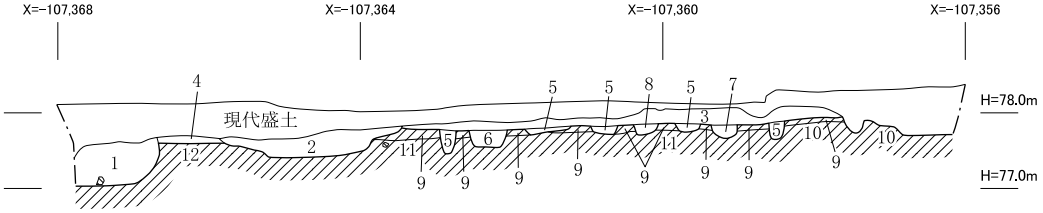
南壁





1 10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂 粗砂混、黄色ブロック混、炭混(攪乱)
2 10YR4/4褐色 粗砂 φ2cm大の礫混(落込)
3 10YR4/4褐色 シルト φ0.5cm大の礫混(土坑)
4 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 φ2cm大の礫混(土坑)
5 10YR4/4褐色 シルト φ0.5～2cm大の礫混、炭・土器混(土坑)
6 10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂 黄色ブロック混、φ2～3cm大の礫混(土坑)
7 10YR3/3暗褐色 極細砂 φ0.5cm大の礫・土器混
8 10YR5/3にぶい黄褐色 極細砂～粗砂 φ1cm大の礫混
9 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 黄色ブロック混
10 10YR4/4褐色 シルト φ2cm大の礫・黄色ブロック混
11 7.5YR4/4褐色 シルト φ0.5～2cm大の礫・土器片混
（7～11：土坑）
12 10YR4/4褐色 シルト φ0.5cm大の礫混(土坑)
13 10YR4/4褐色 シルト 粗砂～φ0.5cm大の礫・炭・土器混(江戸時代整地層)
14 10YR4/6褐色 極細砂 黄色ブロック混、炭混
15 10YR4/4褐色 シルト 粘質 粗砂混
（14～15：土坑）
16 10YR4/6褐色 シルト 粗砂・黄色ブロック混
17 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 粘質 粗砂混
（16～17：土坑）
18 10YR4/4褐色 細砂 φ0.5cm大の礫混
19 7.5YR4/4褐色 シルト 粗砂混 固くしまる
（18～19：溝306）
20 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト φ0.5～2cm大の礫混(土坑)
21 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト 粘質 φ0.5cm大の礫混、土器混
22 10YR4/4褐色 シルト 粗砂混
（21～22：溝536）
23 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 粘質 φ1cm大の礫・土器混
24 10YR4/4褐色 極細砂 φ2cm大の礫混
（23～24：柱穴）
25 10YR4/4褐色 極細砂
26 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト φ0.5cm大の礫・土器混
27 10YR4/4褐色 極細砂 土器混
（25～27：室町時代整地層）
28 10YR3/4暗褐色 シルト 粘質 φ0.5～2cm大の礫混(柱穴列2 柱穴663)
29 10YR4/4褐色 細砂・シルト φ0.5cm大の礫混(柱穴)
30 10YR6/6明黄褐色 シルト 粘質
31 10YR3/4暗褐色 粘土
32 10YR5/8黄褐色 極細砂 粘質 粗砂混
33 10YR5/6黄褐色 シルト 粗砂 φ1cm大の礫混
（30～33：基盤層）

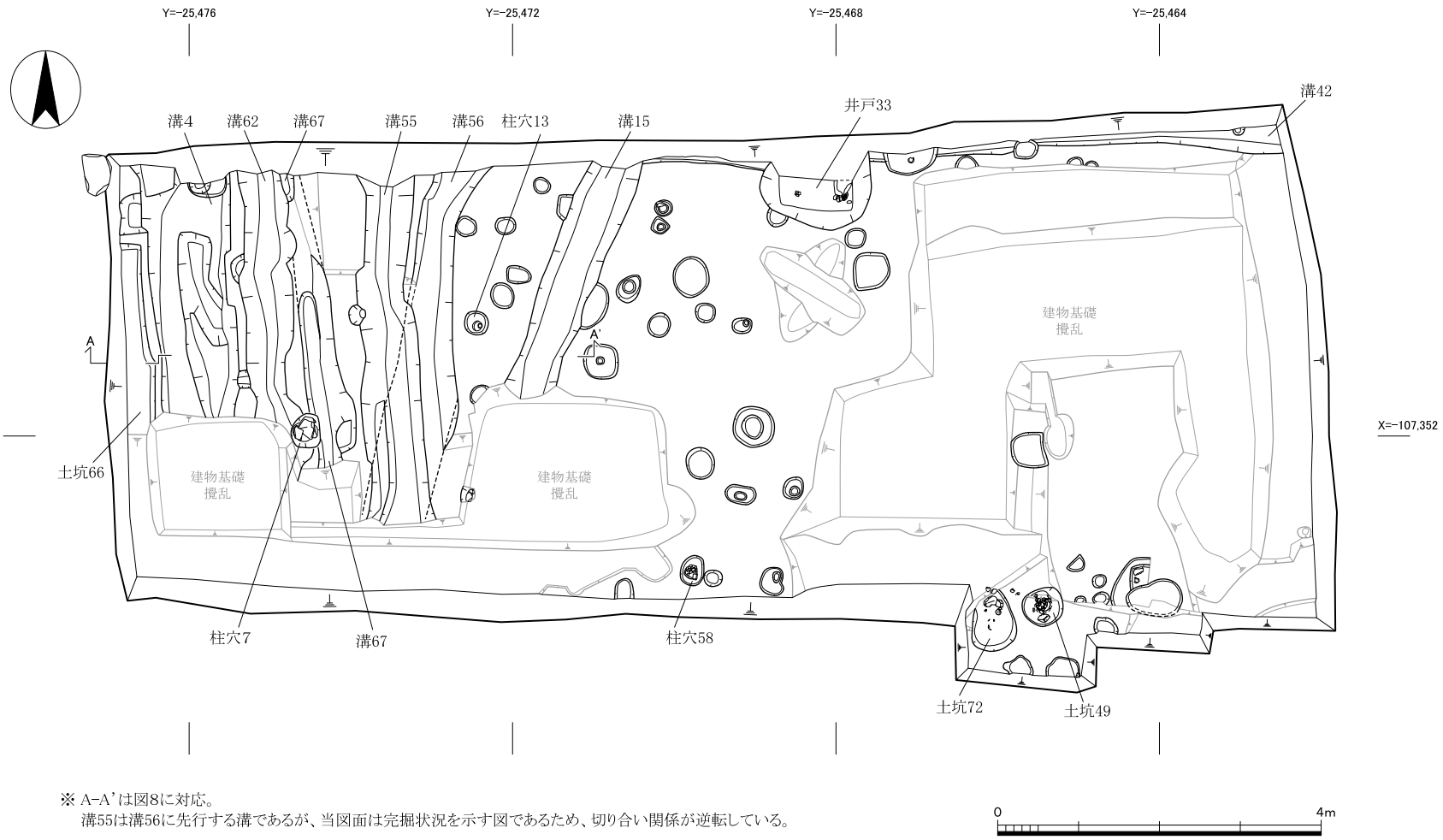
西壁



1 10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂 粗砂混、黄色ブロック混、炭混(攪乱)
2 10YR4/4褐色 シルト 粘質 粗砂～φ0.5cm大の礫・土器・炭混(土坑)
3 10YR4/4褐色 シルト 粗砂～φ0.5cm大の礫・炭・土器混(江戸時代整地層)
4 10YR5/3にぶい黄褐色 極細砂 φ0.5cm大の礫混(室町時代整地層)
5 10YR4/4褐色 極細砂 φ0.5cm大の礫・炭・土器混(柱穴)
6 10YR4/6褐色 極細砂 φ0.5cm大の礫混(柱穴)
7 10YR5/6黄褐色 粗砂 φ1cm大の礫混(建物3 柱穴309)
8 10YR4/4褐色 粗砂 φ1cm大の礫混(建物3 柱穴310)
9 10YR5/4にぶい黄褐色 極細砂 φ0.5～1cm大の礫混
10 10YR5/8黄褐色 シルト 粗砂混 粘質
11 10YR5/6黄褐色 シルト φ2～3cm大の礫混
12 10YR6/6明黄褐色 極細砂 φ0.5～2cm大の礫混
（9～12：基盤層）

0 5m

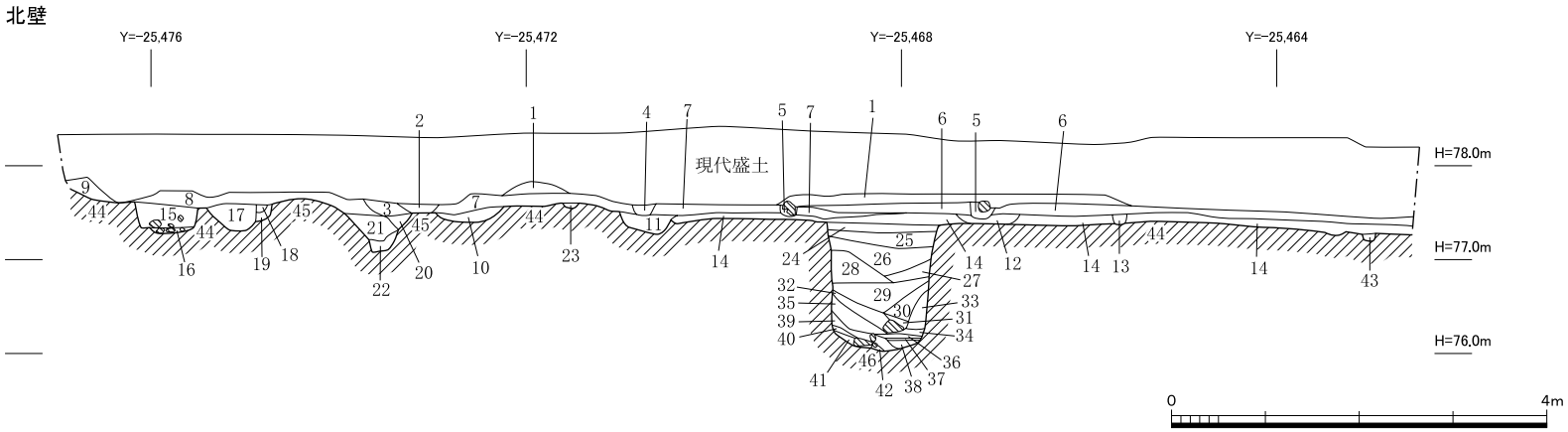
3区平面図（1：80）



※ A-A'は図8に対応。
溝55は溝56に先行する溝であるが、当図面は完掘状況を示す図であるため、切り合い関係が逆転している。

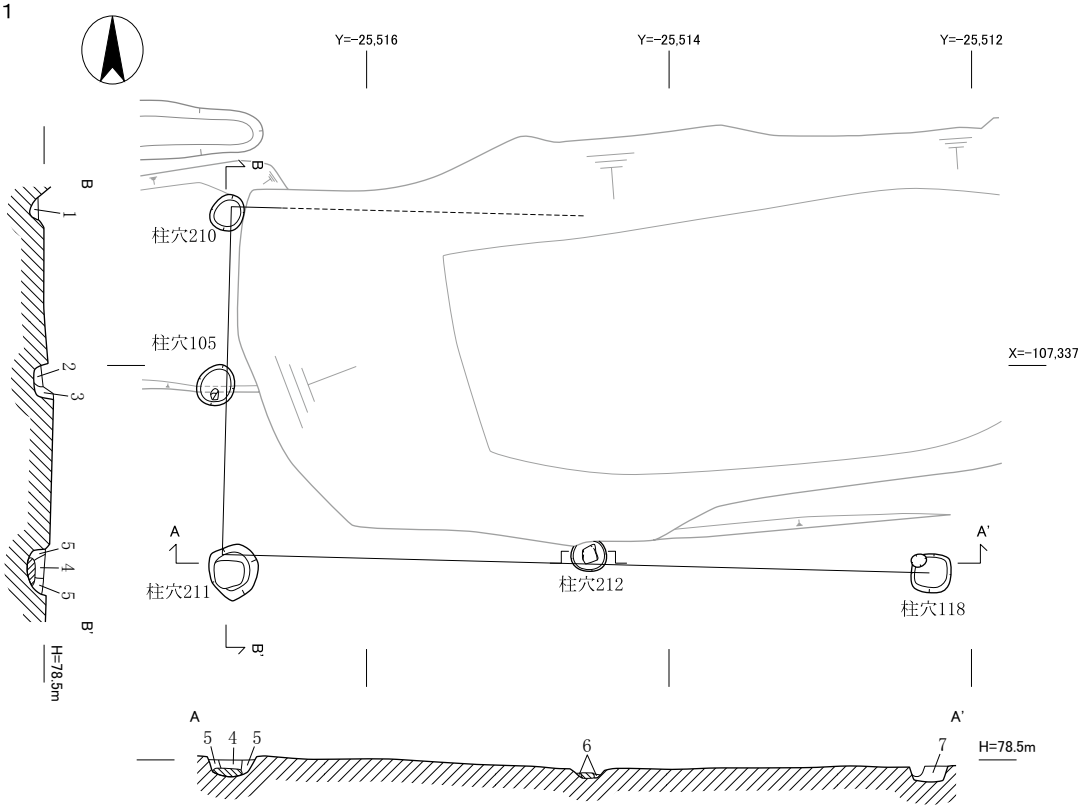
図版5 遺構

3区北壁断面図（1：80）



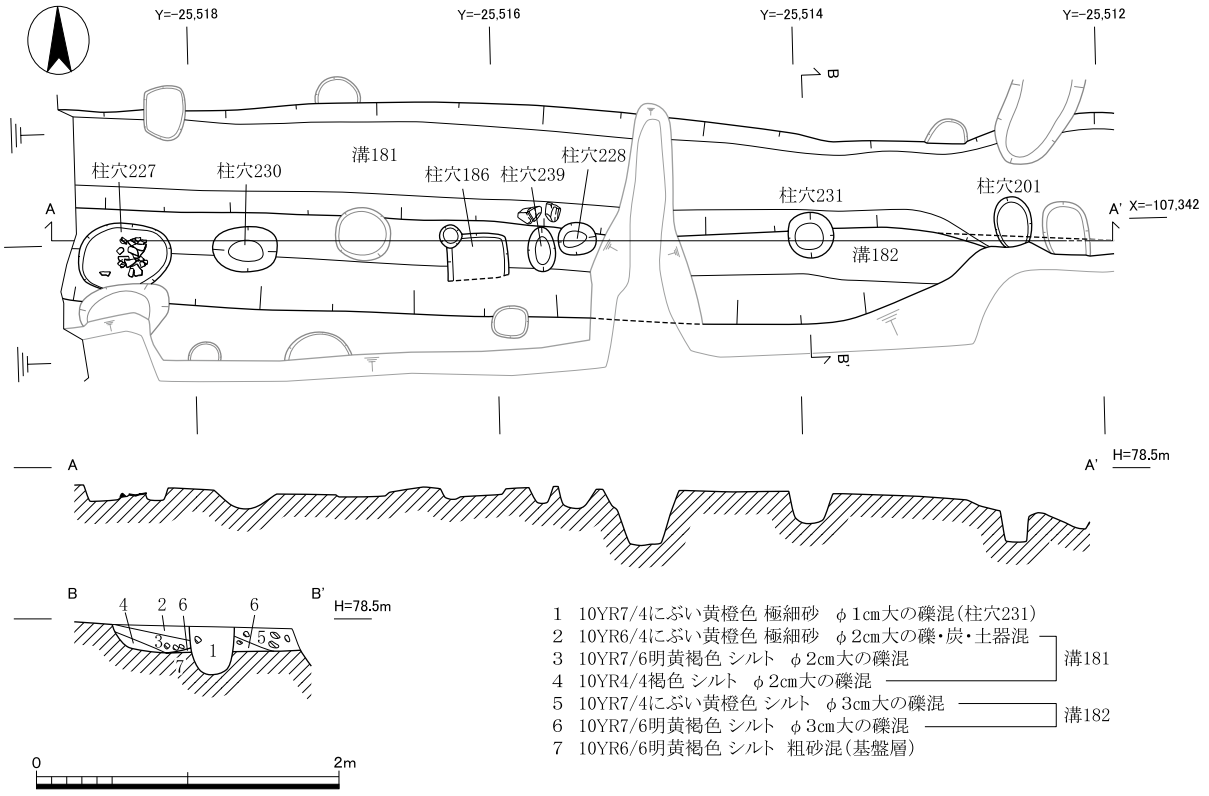
1 10YR5/4にぶい黄褐色 細砂 土器・炭混(江戸時代整地層)
2 10YR6/4にぶい黄橙色 シルト φ1～3cm大の礫混 ┐土坑
3 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 粗砂混 ┘
4 10YR5/4にぶい黄褐色 極細砂 φ3～4cm大の礫混(柱穴)
5 10YR6/4にぶい黄橙色 シルト φ16cm大の礫混(柱穴)
6 10YR6/4にぶい黄橙色 シルト 粗砂混 ┐江戸時代整地層
7 10YR5/6黄褐色 細砂 φ3cm大の礫混 │
8 10YR6/4にぶい黄橙色 シルト φ4～10cm大の礫・土器・炭混 │
9 10YR6/4にぶい黄橙色 細砂 粗砂～φ10cm大の礫混 土器混 ┘
10 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト φ3cm大の礫混(溝56)
11 10YR4/6褐色 細砂 φ2～3cm大の礫混(溝15)
12 10YR5/4にぶい黄褐色 極細砂 粗砂混(土坑)
13 10YR5/6黄褐色 シルト 粗砂混(柱穴)
14 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト φ2cm大の礫・炭・土器混(溝42)
15 7.5YR4/4褐色 細砂 φ5～12cm大の礫多量混 ┐溝4
16 7.5YR5/6明褐色 極細砂 φ5～15cm大の礫多量混 ┘
17 7.5YR4/4褐色 シルト 粗砂混、φ3cm大の礫混(溝62)
18 10YR7/6明黄褐色 細砂 ラミナ ┐溝67
19 10YR4/6褐色 シルト 粗砂・φ3～5cm大の礫混 ┘
20 10YR6/4にぶい黄橙色 シルト φ2cm大の礫混 ┐溝55
21 10YR5/4にぶい黄褐色 極細砂 φ2～3cm大の礫混 │
22 10YR4/4褐色 細砂 φ3cm大の礫混 ┘
23 10YR7/6明黄褐色 シルト 粗砂混
24 10YR6/3にぶい黄橙色 シルト 粗砂・土器混 ┐井戸33
25 10YR5/8黄褐色 細砂 φ2～3cm大の礫混 土器混 固くしまる │
26 10YR6/6明黄褐色 細砂 φ2～3cm大の礫混 土器混 固くしまる │
27 10YR5/3にぶい黄褐色 細砂 φ2～3cm大の礫混 │
28 10YR5/4にぶい黄褐色 細砂 粗砂・炭混 │
29 10YR4/6褐色 粘土 10YR6/8明黄褐色細砂ブロック混 │
30 10YR5/2灰黄褐色 シルト 粘質 φ2cm大の礫混 │
31 10YR6/6明黄褐色 粗砂 │
32 10YR4/4褐色 シルト 粘質 10YR6/6明黄褐色シルト粘質土混 │
33 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 φ2cm大の礫混 │
34 10YR4/2灰黄褐色 粘土 粗砂混 │
35 10YR4/1褐灰色 粘土 粗砂混 │
36 10YR5/2灰黄褐色 粘土 │
37 10YR5/3にぶい黄褐色 粘土 粗砂混 │
38 10YR4/2灰黄褐色 粘土 │
39 10YR4/1褐灰色 粘土 細砂混 │
40 10YR4/4褐色 粗砂 粘質 │
41 10YR3/4暗褐色 シルト 粘質 細砂混 │
42 10YR5/3にぶい黄褐色 粘土 粗砂混 ┘
43 10YR4/4褐色 細砂 φ3cm大の礫混(柱穴)
44 10YR7/6明黄褐色 極細砂 φ2～3cm大の礫混 ┐基盤層
45 10YR8/8黄橙色 シルト 粗砂混 │
46 10YR7/8黄橙色 シルト 粗砂混 ┘

建物1



1 10YR5/6黄褐色 細砂
2 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト
3 10YR4/6褐色 細砂 固くしまる 地山ブロック混
4 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 炭・土器混
5 10YR4/6褐色 細砂
6 10YR4/4褐色 シルト φ1～3cm大の礫混
7 10YR4/6褐色 粗砂 φ1cm大の礫混

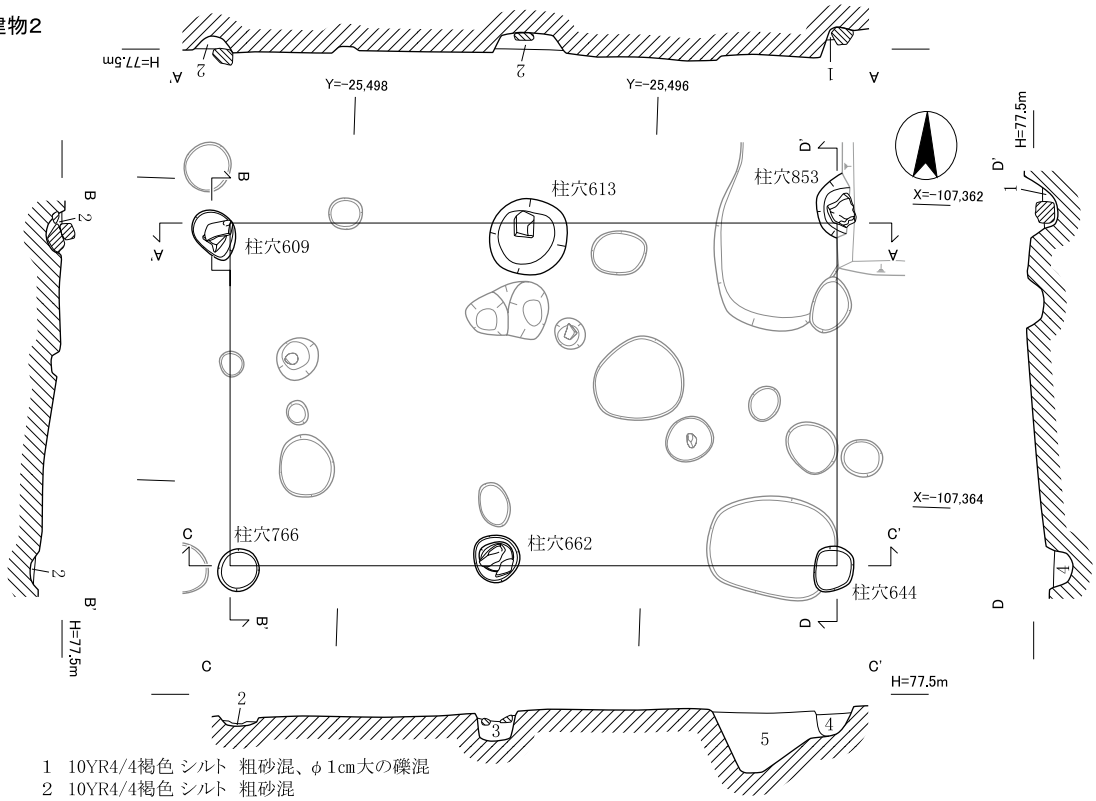
柱穴列1



1 10YR7/4にぶい黄橙色 極細砂 φ1cm大の礫混(柱穴231)
2 10YR6/4にぶい黄橙色 極細砂 φ2cm大の礫・炭・土器混
3 10YR7/6明黄褐色 シルト φ2cm大の礫混 溝181
4 10YR4/4褐色 シルト φ2cm大の礫混
5 10YR7/4にぶい黄橙色 シルト φ3cm大の礫混
6 10YR7/6明黄褐色 シルト φ3cm大の礫混 溝182
7 10YR6/6明黄褐色 シルト 粗砂混(基盤層)

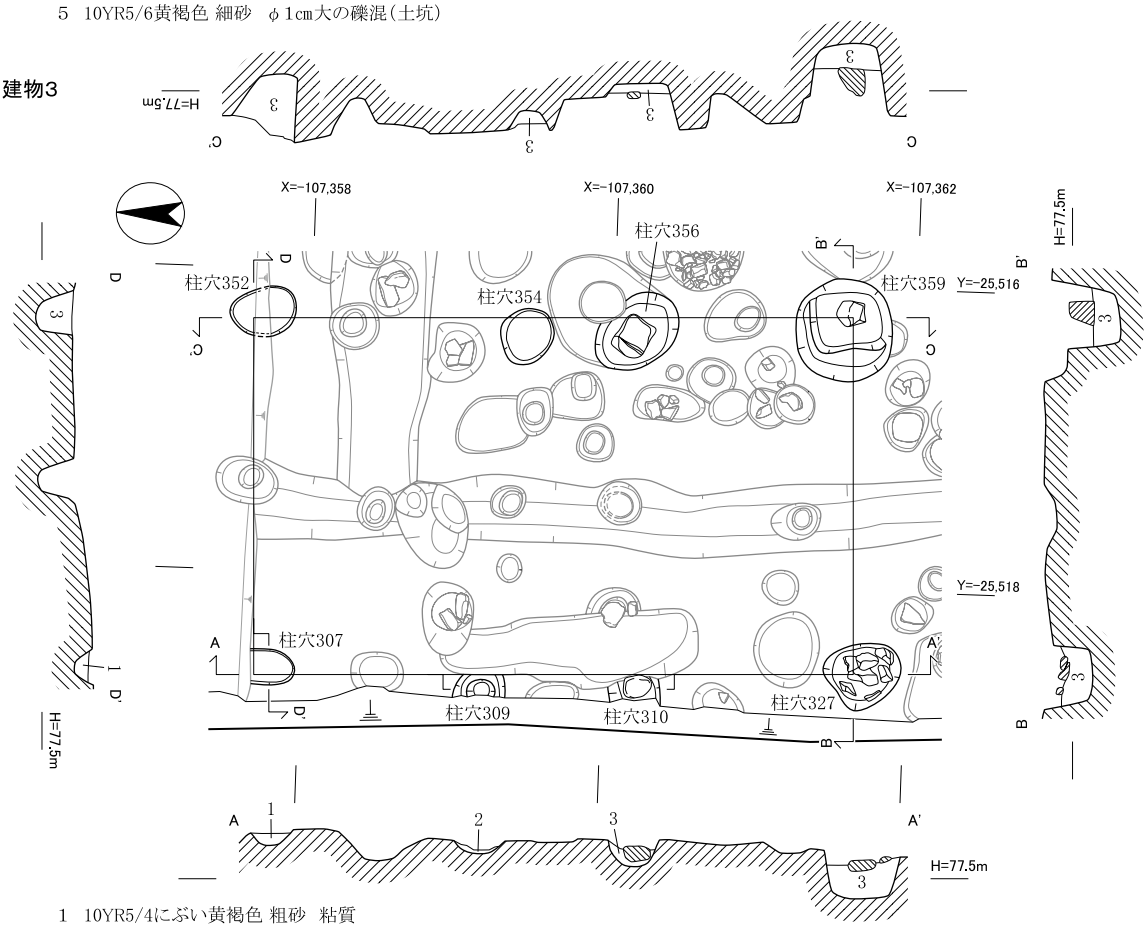
1区建物1・柱穴列1実測図（1：50）

建物2



1 10YR4/4褐色 シルト 粗砂混、φ1cm大の礫混
2 10YR4/4褐色 シルト 粗砂混
3 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト 粗砂混
4 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 粗砂混
5 10YR5/6黄褐色 細砂 φ1cm大の礫混(土坑)

建物3



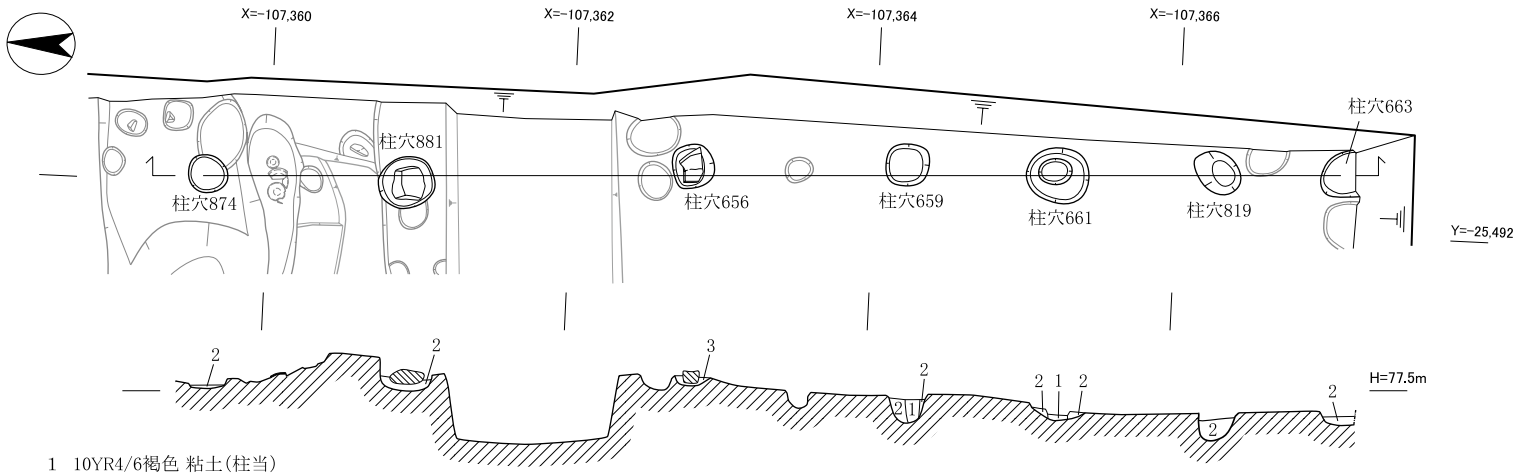
1 10YR5/4にぶい黄褐色 粗砂 粘質
2 10YR5/6黄褐色 粗砂 φ1cm大の礫混
3 10YR4/4褐色 粗砂 φ1cm大の礫混

0 2m

２区建物２・３実測図（１：50）

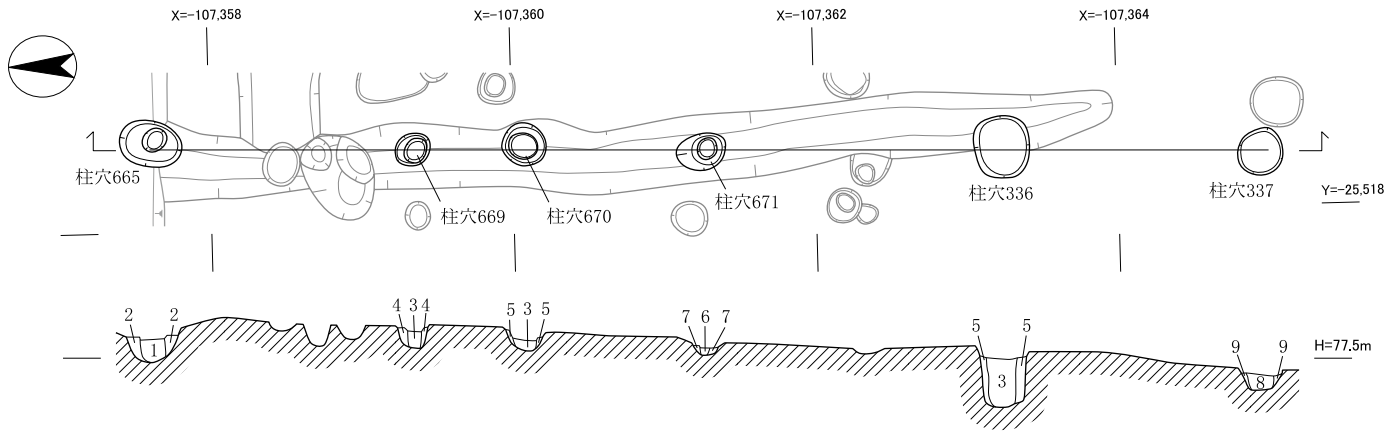
2区柱穴列2・3実測図（1：50）

柱穴列2



1　10YR4/6褐色 粘土(柱当)
2　10YR5/4にぶい黄褐色 粘土　φ0.5cm大の礫混
3　10YR5/4にぶい黄褐色 極細砂　粗砂混

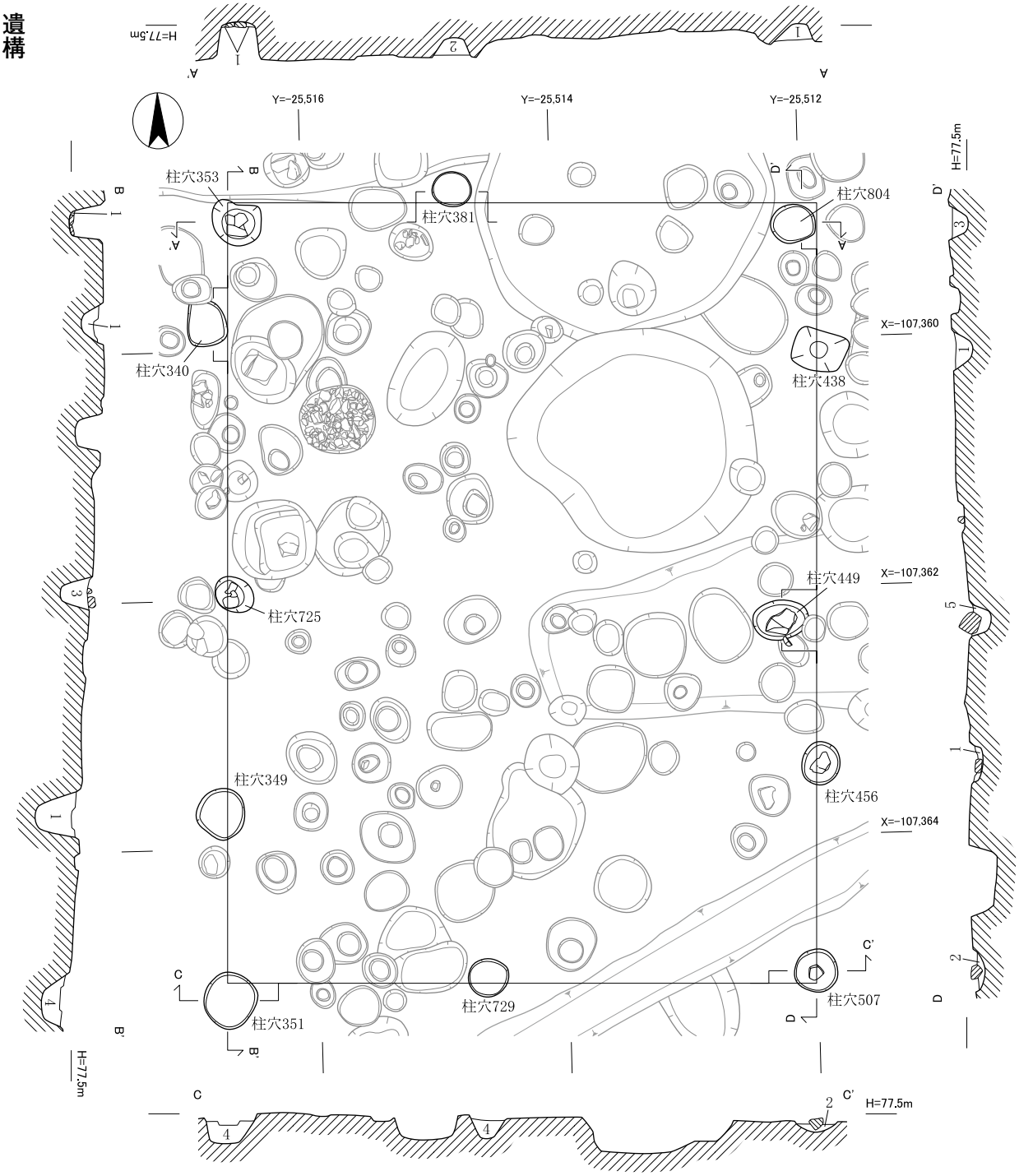
柱穴列3



1　10YR5/4にぶい黄褐色 細砂
2　10YR3/4暗褐色 シルト　細砂混
3　10YR4/4褐色 シルト　粘質　粗砂混
4　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト　粘質　φ0.5cm大の礫混
5　10YR4/3にぶい黄褐色 シルト　粘質　細砂混
6　10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂　φ1cm大の礫混
7　10YR4/6褐色 極細砂　粗砂混
8　10YR5/8黄褐色 極細砂
9　10YR5/6黄褐色 極細砂　粘質

0　2m

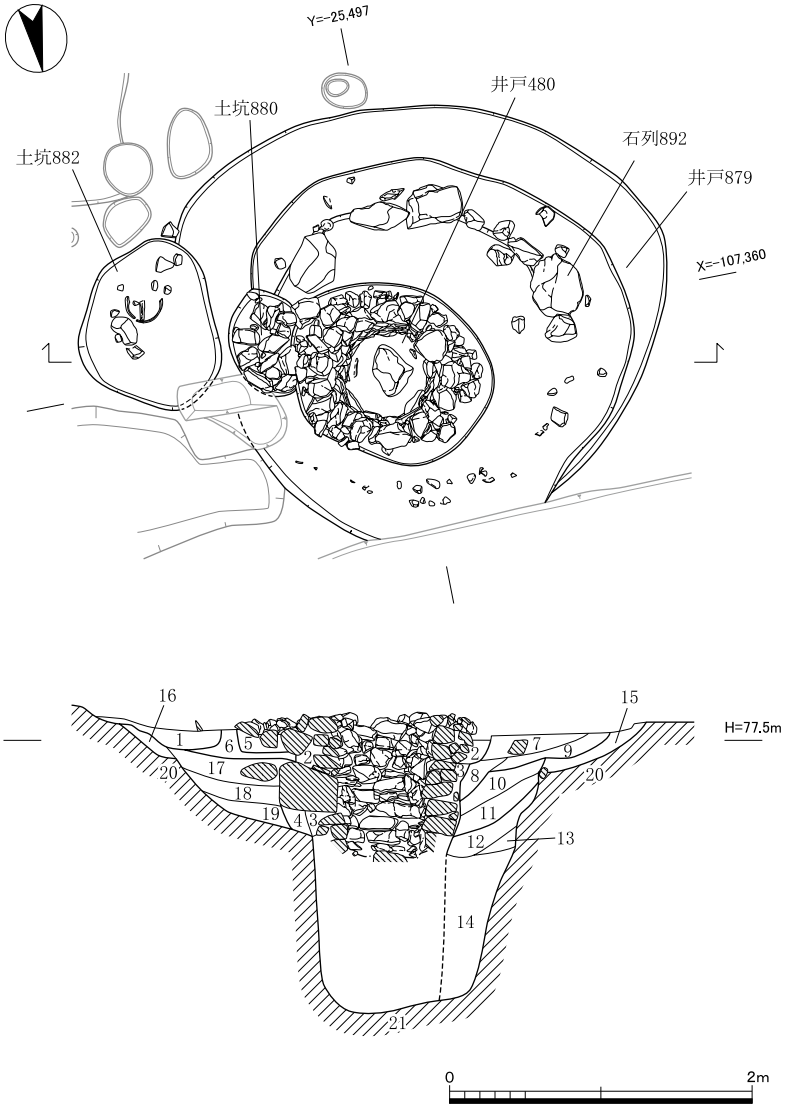
図版6　遺構



1 10YR4/4褐色 粗砂 φ1cm大の礫混
2 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト φ1cm大の礫混
3 10YR5/6黄褐色 粗砂 φ1cm大の礫混
4 10YR4/6褐色 粗砂 φ1cm大の礫混
5 10YR3/3暗褐色 粗砂 φ1cm大の礫混

0 2m

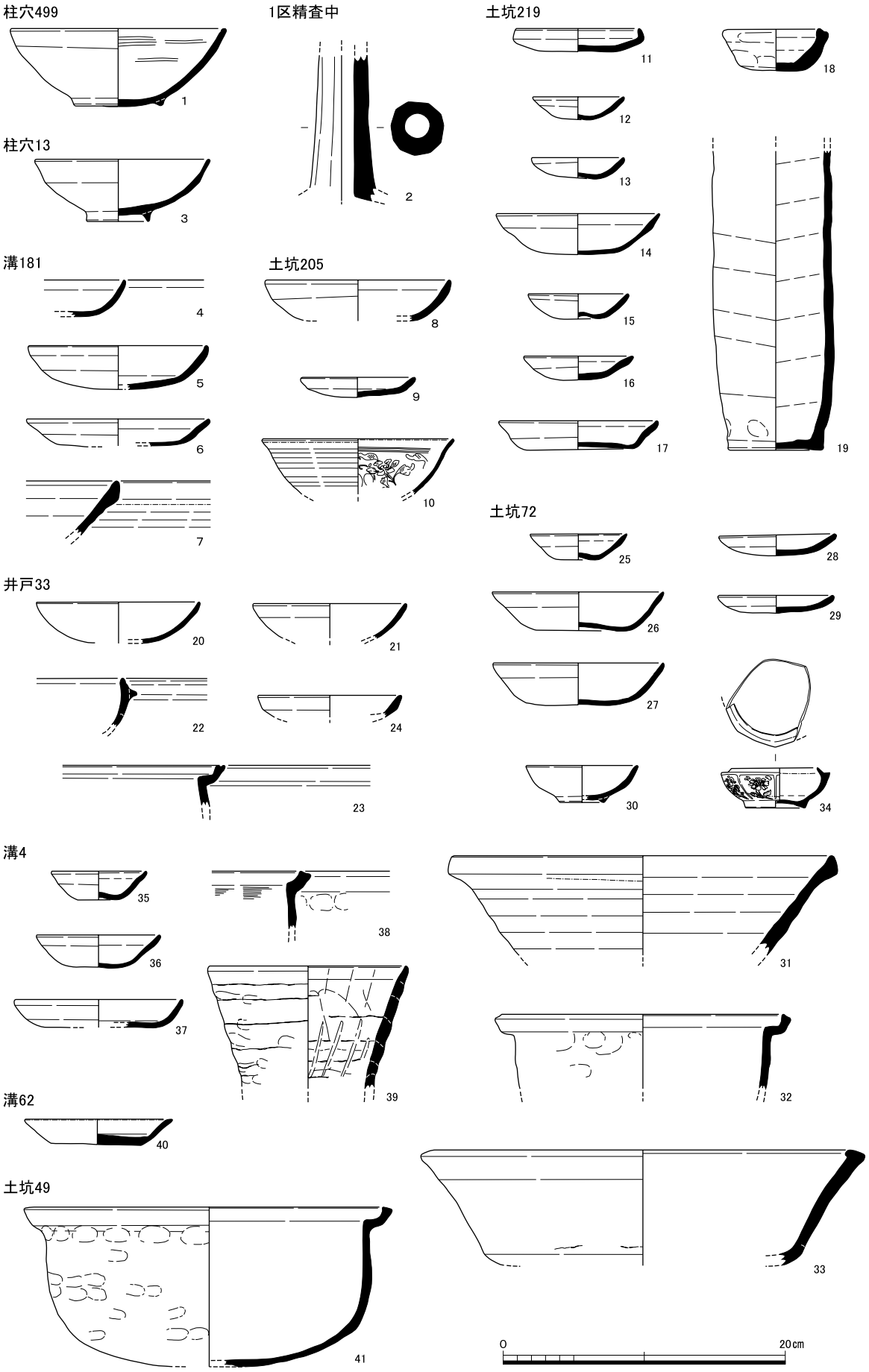
２区建物４実測図（１：50）



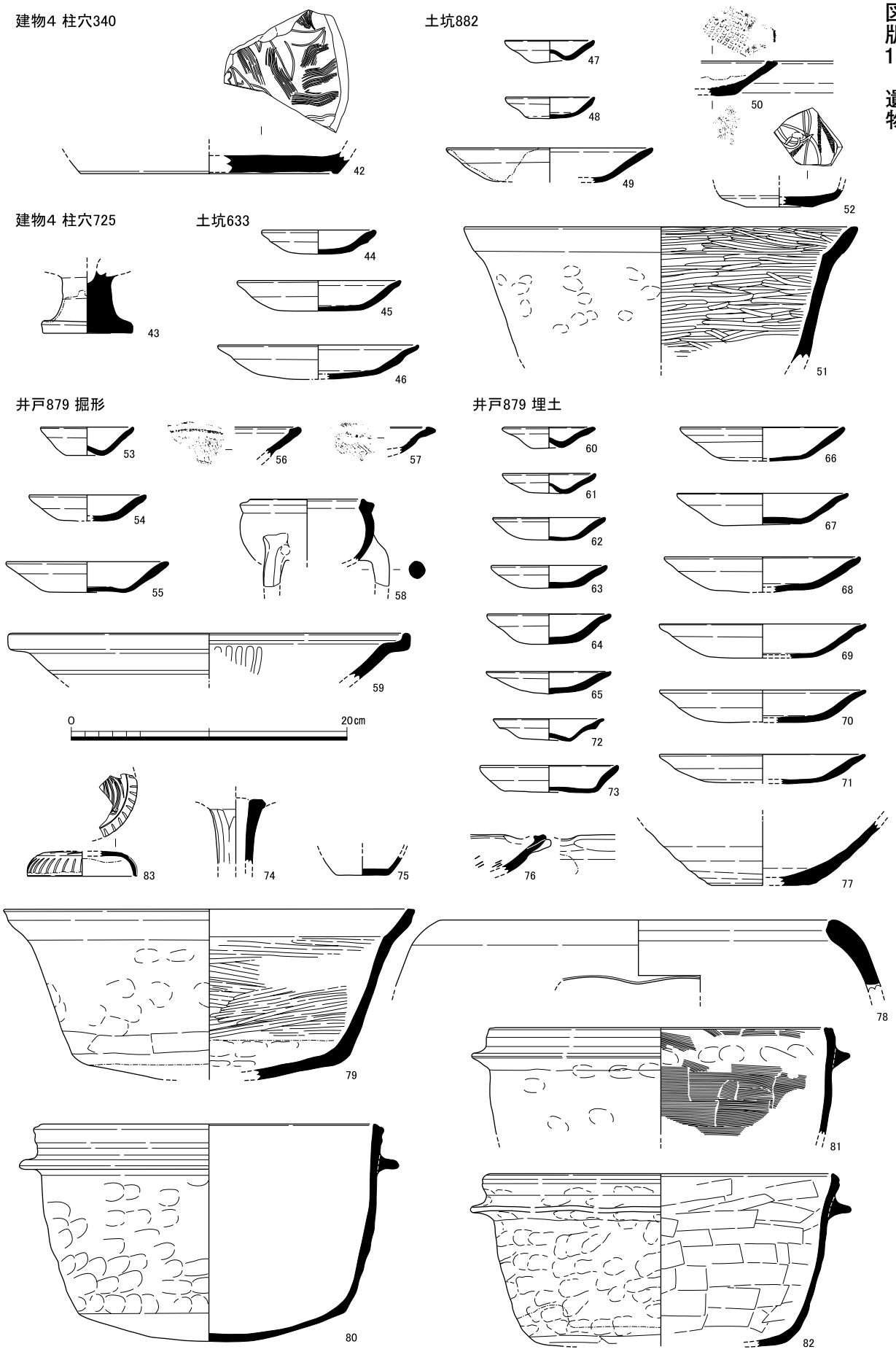
1	10YR3/4暗褐色 シルト 粗砂混	土坑882
2	10YR3/4暗褐色 粘土 粗砂混 φ0.5～1cm大の礫混 土器混	井戸480掘形
3	10YR3/4暗褐色 シルト 粘質 粗砂混 φ0.5～1cm大の礫混 土器混	
4	10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 粗砂混	
5	10YR4/4褐色 シルト φ2cm大の礫混 土器混	土坑880
6	10YR4/4褐色 極細砂 粗砂混 φ0.5cm大の礫混	井戸879埋土(上層)
7	10YR3/3暗褐色 シルト 粗砂混 土器混	
8	10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 粘質 土器混	
9	10YR4/4褐色 細砂 粘質	
10	10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 粘質	井戸879埋土(中層)
11	10YR4/4褐色 シルト 粘質 粗砂混	
12	10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 粗砂混	井戸879埋土(下層)
13	10YR3/4暗褐色 極細砂 粗砂混	
14	10YR3/4暗褐色 シルト 粘質 細砂混 木片・φ20cm大の礫混	
15	10YR3/4暗褐色 細砂 φ0.5cm大の礫混	井戸879掘形
16	10YR5/6黄褐色 細砂 粗砂混	
17	10YR4/4褐色 シルト 粘質 粗砂混 土器混	
18	10YR3/4暗褐色 細砂 φ0.5～1cm大の礫混	
19	10YR4/4褐色 シルト 粘質 φ1cm大の礫混	
20	10YR6/6明黄褐色 極細砂 φ1cm大の礫混混	基盤層
21	N7/0灰白色 シルト～極細砂	

2区井戸480・879、石列892、土坑880・882実測図（1：50）

図版12　遺物



鎌倉時代の土器実測図（1：4）



室町時代の土器実測図１（１：４）

図版14　遺構

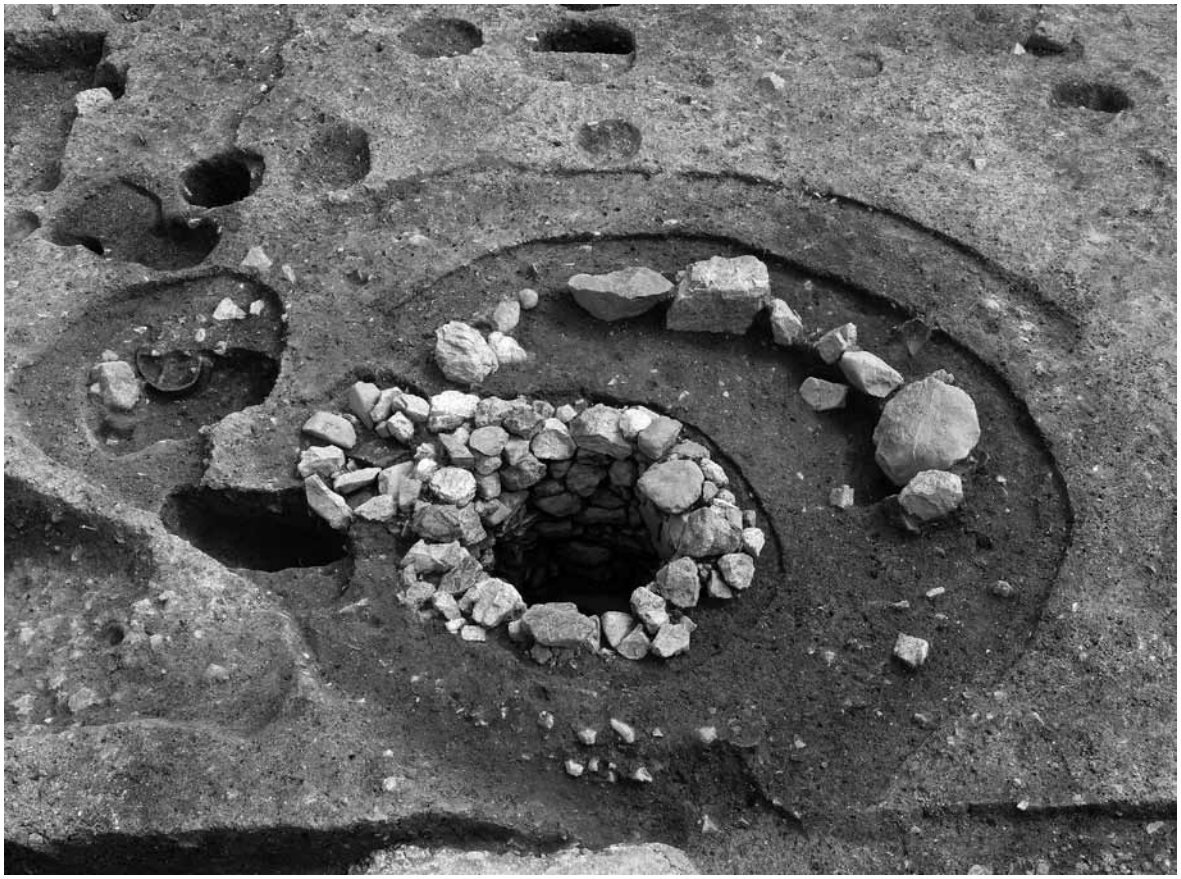
1　１区全景（西から）

2　溝181（東から）

3　溝123・175、土坑124（北東から）

1　２区全景（東から）

2　２区西半柱穴群検出状況（北から）



1　井戸879・480検出状況（北から）

2　井戸879・480断面（北から）

1　土坑882瓦器鍋出土状況（北から）

2　土坑633土器出土状況（北東から）

3　建物４ 柱穴725（南から）

図版18　遺構

1　３区全景（西から）

2　溝４・62・67・55（南から）

3　溝56・15（南から）

1　土坑49瓦器鍋出土状況（北から）

2　井戸33埋納状況（西から）

3　溝４硯出土状況（北西から）

4　柱穴13土器出土状況（東から）

1

3

12

14

16

17

25

27

28

34

40

39

19

41

鎌倉時代の土器類

60

72

62

73

63

83

64

66

79

67

71

80

84

86

85

88

室町時代の土器類

瓦1

瓦4

瓦5

瓦6

瓦7

瓦9

瓦10

瓦11

瓦12

石3

石1

石2

石4

石7

瓦類、石製品

報　告　書　抄　録

ふりがな	りょうあんじごりょうのしたちょういせき
書名	龍安寺御陵ノ下町遺跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０２５－２
編著者名	西田倫子
編集機関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発行所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2026年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
龍安寺御陵ノ下町遺跡（りょうあんじごりょうのしたちょういせき）	京都市右京区（きょうとしうきょうく） 龍安寺御陵ノ下町（りょうあんじごりょうのしたちょう）2-3、2-4	26100	938	35度01分55秒	135度43分14秒	2024年12月23日～2025年４月17日	600㎡	校舎建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
龍安寺御陵ノ下町遺跡	散布地	旧石器時代～縄文時代		石器	当地は鎌倉時代から土地利用がみられ、室町時代に最盛期を迎えることがわかった。
		平安時代		土師器、瓦類	
		鎌倉時代	建物、柱穴列、柱穴、土坑、井戸、溝	土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶椀、瓦器、白色土器、土師質土器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品	
		室町時代	建物、柱穴列、柱穴、土坑、井戸、石列、溝	土師器、須恵器、山茶椀、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、金属製品、石製品	
		江戸時代	土坑、溝	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、瓦類、金属製品、石製品	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2025-2

龍安寺御陵ノ下町遺跡

発行日　2026年3月31日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　℡ 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273番
〒602-8358　℡ 075-467-5151